

08
SCRIP

母女学院高等学校 大阪歯科大
の連携協力に関する協定 調印式



09

教育の連携協力に関する協定

Science, Art & Heart



12

ボランティア活動



03

卒業式

Contents

大阪歯科大学広報第 178 号

02 Topics

- ・ SCRP 日本代表選抜大会にて本学学生が臨床部門第 2 位獲得
- ・ 大阪聖母女学院高等学校と「教育の連携協力に関する協定」締結
- ・ 歯学部学生が奈良マラソン救護班としてボランティア参加
- ・ 夢は歯科医師初のテコンドー選手として東京オリンピック出場
- ・ 創立 100 周年記念館が第 36 回大阪まちなみ賞に入賞

06 医療保健学部 関係ニュース

- ・ 医療保健学部開設記念シンポジウム「近未来の歯科医療のすがた - デジタルデンティストリーの世界 (CAD/CAM) -」開催
- ・ 2016 年度オープンキャンパス

07 2016 年度 歯学部オープンキャンパス

07 国際交流

- ・ 山西医科大学と学生交流協定締結
- ・ 学生短期海外研修報告 (シドニー大学歯学部、コロンビア大学歯学部)

13 平成 28 年度 大阪歯科大学卒業式

- ・ 理事長・学長式辞
- ・ 来賓祝辞 同窓会会長 生駒 等

15 学位・博士(歯学)授与

16 2016 年度 定年退職者

- ・ 「定年退職を迎えて」 田中 昭男
- ・ 「退職するにあたって」 佐ノ木 幸夫
- ・ 「定年退職のご挨拶」 小正 裕
- ・ 「感謝の気持ちを込めて」 方 一如
- ・ 「定年退職のご挨拶」 小出 武

23 平成 28 年度私立大学等改革総合支援事業採択

23 行事報告

▶大学

- ・ 2016 年度 人権講演会(人権標語表彰式)
- ・ 第 24 回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座、枚方講座)
- ・ 2016 年度 第 6 学年父兄会・個人懇談会

- ・ 2016 年度 FD セミナー (第 6 ~ 10 回)

- ・ 2016 年度 地方父兄会

- ・ 2016 年度 大学祭

- ・ 中学生職場体験学習

- ・ 平成 28 年度 子ども大学探検隊

- ・ 2016 年度 解剖体遺骨返還式

- ・ ひらかた市民大学 2016

- ・ 2016 年度 防災・防火訓練

- ・ 2016 年 教職員忘年慰労会

▶附属病院

- ・ 2016 年度 院内感染対策講習会(第 7 ~ 9 回)

- ・ 第 5 回 指導歯科医に対する講習会

- ・ 臨床研修管理運営委員会(全体会議)

- ・ 医療機器安全管理講習会

- ・ 歯科医師臨床研修全体会議

歯科医師臨床研修 情報交換会

歯科医師臨床研修 研修歯科医症例報告会

歯科医師臨床研修 協力型臨床研修施設による施設紹介・面談会

歯科医師臨床研修 研修歯科医修了証授与式

34 2017 年 新年互礼会

- ・ 年頭所感 理事長・学長 川添 堯彬

42 第 110 回歯科医師国家試験結果

42 平成 28 年度 専門学校卒業式

43 2017 年度 大阪歯科大学学術研究奨励助成金(大学院生)

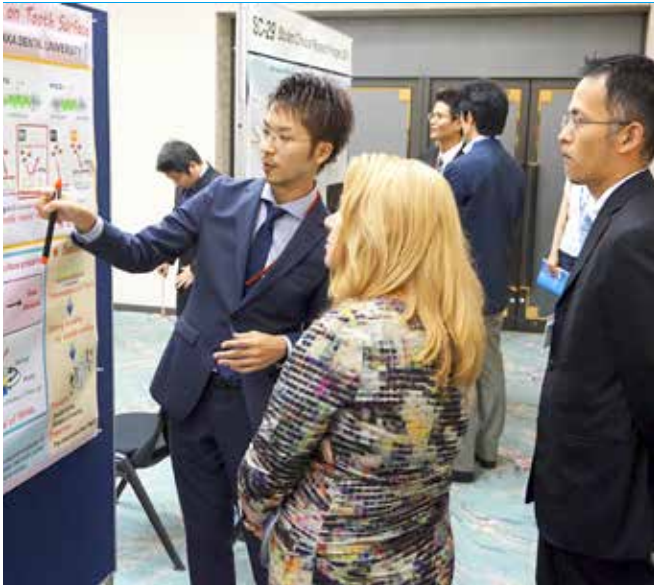
43 平成 29 年度 事業計画

47 寄贈

47 平成 28 年 秋の叙勲受章者

47 人事

48 あとがき



SCRP日本代表選抜大会にて 本学学生が臨床部門第2位を獲得

2016年8月19日(金)、歯科医師会館大会議室(東京)において、平成28年度スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム(SCRP)日本代表選抜大会が開催されました。厳正な審査の結果、本学代表の第4学年小村晃広さん(共同研究者: 榮徹也さん、篠崎百合絵さん、島岡毅さん)の研究発表が高い評価を受け、臨床部門の第2位となりました。

SCRPは、1959年にアメリカで始まり、現在では世界39か国において、各国歯科医師会主催で開催される学術イベントです。日本でも1995年からスタートし、本年度の第22回大会は、初めて全国歯科大学・歯学部29校からのエントリーが達成された記念すべき大会となりました。大会中、全国歯科学生らは自ら設定した研究の成果を、英語によるポスター形式で発表し、白熱した議論を繰り広げました。また、審査結果発表後の懇親会ではそれぞれの健闘をたたえながら親睦を深めました。

受賞者: 小村晃広さん

共同研究者: 榮徹也さん、篠崎百合絵さん、島岡毅さん

テーマ: 「フッ素置換脂肪酸を用いた歯面の化学修飾による着色予防」

ファカルティー・アドバイザー: 津田進 助教(化学教室)

研究指導協力者: 吉川美弘 講師(生化学講座)



9月26日(月)正午から、SCRP表彰盾学内授与式が楠葉学舎中会議室にて行われ、見事に臨床部門第2位入賞を果たした4人に、川添理事長・学長から表彰盾が授与されました。授与式には、今回の研究を直接指導された津田進助教や田中昌博学生部長も出席し、皆で小村さんらの素晴らしい成果をたたえ、喜びを分かち合いました。学生各位にはさらに研鑽を積み、世界に羽ばたく歯科医師、研究者に成長することが期待されています。



大阪聖母女学院高等学校と大阪歯科大学 「教育の連携協力に関する協定」を締結



協定内容

- 1 教育に対する相互支援
- 2 生徒・学生の相互交流
- 3 教員の相互交流
- 4 その他協議し同意した事業
- 5 協定に基づく推薦入学試験の実施



2016年9月30日(金)、本学楠葉学舎大会議室にて、大阪聖母女学院高等学校と大阪歯科大学は「教育の連携協力に関する協定」の調印式を行いました。

今まさしく高等学校と大学とが、次を担う人材の育成に協働で取り組むことが喫緊の課題となっている中、2017年4月より香里ヌヴェール学院と校名も新たに共学化し、「21世紀型教育」を標榜されている大阪聖母女学院中学校・高等学校様より、教育連携へ向けた協力要請がありました。これを受け、このたび高大接続改革の実行を具現化すべく、「教育の連携協力に関する協定」締結を合意するに至りました。

本協定により、これまでに築いてきた相互の信頼関係に基づき、双方の教育についての交流・連携をさらに深めることによって、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学教育の内容や、求められる学生像への理解を深め、かつ双方の教育活動の活性化に取り組んでまいります。

歯学部学生が奈良マラソン救護班としてボランティア参加しました！

2016年12月11日(日)に開催された奈良マラソン2016(奈良県、奈良市、天理市ほか主催)の救護班に、本学歯学部5年生の4名(今井基博君、今岡正晃君、西口雄祐君、山名唯君)がボランティア参加しました。「心停止を起こさせない、万一の時には迅速適切な対応のできる救護活動」として組織された救護班で、学生諸君は一次救命処置を行う「自転車 AED 隊」として参加しました(一次救命処置を行うのに医療資格は不要)。自転車 AED 隊はコースを巡回し、倒れたランナーを発見したら駆け付け、救急専門医が到着するまでの数分間、一次救命処置を行う重要な仕事です。

学生諸君は4年生の授業で心肺蘇生法の知識と技能を身につけてはいますが、さらに歯科麻酔学講座で補習を受け、国際的に通用するAHA BLSヘルスケアプロバイダー資格を取得して参加しました。朝7時に現地集合後、夕方まで救護活動に従事し、幸い一人の心停止者もなくマラソンは終了しました。

今回の本学学生の活動は、「社会に奉仕し貢献する使命感と気概を持つ人」という本学歯学部のアドミッションポリシーと合致するものであり、今後も学生諸君の積極的な参加を期待します。



夢は歯科医師初のテコンドー選手として東京オリンピック出場!



テコンドーで世界を目指す、笑顔が素敵な長田大輝さんは現在歯学部5年生。(2017年2月現在)第10回全日本テコンドー選手権大会(2017年1月22日開催)の男子63kg級で見事3位に入り、ラスベガスで開かれた2017全米オープン選手権(2017年1月31日~2月3日)に出場しました。2回戦で世界的実力者のAchab Jaouad選手(リオデジャネイロ・オリンピック68kg級3位決定戦敗退)と対戦。敗れはしましたが、世界のトップ選手との対戦は長田さんにとって掛け替えのない経験となりました。学業とテコンドーに全力投球の日々を送り「夢は東京オリンピック出場!」と語る長田大輝さんを以下に紹介します。



長田さんが小学生時代から行っているテコンドーとは、華麗で優美な足技を得意とする格闘技で、韓国の国技です。長田さんは受験等で一時休止していたそうですが、大学2年から再開し今に至ります。

小学生時代は全国大会優勝の実績もある長田さん。テコンドー再開後はすぐに以前の感覚を取り戻し、どんどん勝ち抜いていたそうです。ところがそんなある日、大阪府テコンドー選手権大会でオリンピック日本代表を務めたことのある選手と手合せ(足合せ?)しました。日々テコンドーに打ち込んでいる相手選手。圧倒的な凄味を肌で感じ、そのあまりの強さにテコンドーに対する長田さんの意識がその時を境に変わったそうです。“このままでは駄目だ。もっと強くなりたい!”

長田 大輝 Daiki Nagata

大阪歯科大学 歯学部5年 (2017年2月現在)

現在は毎日ハードな練習をこなしつつ、歯科大生の本分である勉強も怠らない長田さん。そんな長田さんに勉強とテコンドー、二刀流の大学生活やテコンドーにかける思いなどを伺いました。

—勉強と格闘技、違う分野を両立させるコツは?

長田:短い時間を有効に使うために、頭のスイッチを切り替えることが重要だと思います。本来は勉強が基本ですからね。

—それでも疲れて身が入らないことなどはありますか?

長田:そんな時は、テコンドーを始めたばかりの時に体験したキツイ合宿練習を思い出すことにしています。そうするとあの時と比べれば楽だ!と思えて、勉強や練習にも身が入ります。

—長田さんの心の中に、「限界を感じた瞬間を自らの力で乗り越えた」という成功経験と自信があるからこそ、軽やかに出る言葉かもしれませんね。長田さんが大阪歯科大学へ入学した当初に感動したことは何でしたか。

長田:たくさんのカリキュラムがあったのですが口腔外科に興味があったので、1年生の実習(アーリーエクスポージャー/早期臨床体験学習)で初めて先生方の技術を目の前で拝見できたときは感激しました。

—本学の学修内容(カリキュラム)について意見や要望等がありますか。

長田:「実習経験が多い」という点は大阪歯科大学の特徴で、学びの機会が多いというメリットでもあるけれど、「多くの実習の中から自分で必要な技能を選び深く学ぶ」という選択肢があれば、より深く、学びの奥にあるひらめきや提案も出るのでは?と思います。

—先輩に伝えたいことはありますか。

長田:とにかくやりたいことをやってみる。チャレンジ精神を持ち続けてほしい。勉強ばかりでは見えないものや、世界がある。そのことを体験してほしい。

—先輩からの心強い一言。チャレンジしなくては見えてこないものがたくさんありますよね。最後に現在の夢は何ですか?

長田:これからも学業と両立して、国家試験ストレート合格、東京オリンピックでの金メダル獲得を目標に精進して参ります。

素晴らしい夢を伺いました。これまで歯科医師でオリンピック選手というと、1984年冬季サラエボオリンピックのフィギュアスケート代表・小川勝氏が有名ですが、長田さんには夏季オリンピック出場・歯科医師第1号(!?)となって是非とも夢を叶えてもらいたいものです。本学関係者一同、長田さんの夢を心から応援しています。

創立 100 周年記念館が第 36 回大阪まちなみ賞に入賞



「大阪歯科大学創立 100 周年記念館」(所在地: 本学天満橋学舎)が第 36 回大阪都市景観建築賞(愛称: 大阪まちなみ賞)“奨励賞”を受賞し、2017 年 1 月 17 日に大阪府庁で行われた表彰式に川添堯彬理事長・学長が出席しました。

本賞は、美しく個性と風格のあるまちの景観づくりを進めていくために、周辺環境の向上に資し、かつ景観上優れた「建物」や「建物を中心としたまちなみ」を広く一般から推薦して、その中で特に優れたものを表彰するもので、大阪府・大阪市・(公社)大阪府建築士会等 6 団体が主催しています。昭和 56 年から実施され、大阪府知事賞、大阪市長賞、審査員特別賞、緑化賞、建築サイン・アート賞及び奨励賞が設けられています。

今回の受賞では、「正面ハニカムタイルスクリーンが、素材の技で高品質感を醸し出している」こと、「隣地既存大学施設の色彩を引き継ぎ、大学建物との関係性と周辺マンションへの配慮から高さを設定」するなど「シンボルとなる民間の建築はこうあるべき、とさえ思わせる配慮がある」ことが高く評価されました。ちなみに、建物の最大の特徴である正面ハニカムタイルは、本学のシンボルマークを象(かたど)った希少なもので 3,748 枚(皆よい歯)施されています。



創立 100 周年記念館は、文字どおり本学創立 100 周年記念事業の一つとして建設され、2013 年 3 月の竣工以来、5・6 年生の勉学の拠点にとどまらず、教職員の研修や公開講座、各種学会の開催などに広く利用され、学び舎としての存在感を年々増しています。周辺の環境に調和した記念館の佇まいさながら、本学はこれからも地域に根ざした大学、病院であるよう努めてまいります。

|| 医療保健学部 関係ニュース

医療保健学部開設記念シンポジウム

「近未来の歯科医療のすがた - デジタルデンティストリーの世界 (CAD/CAM)-」 開催

大阪歯科大学では、2017年4月から牧野学舎に医療保健学部を開設することについて、平成28年8月31日付けで文部科学大臣から認可を受けました。これを記念し、10月30日(日)にホテル日航大阪において、「近未来の歯科医療のすがた - デジタルデンティストリーの世界 (CAD/CAM)-」と題しシンポジウムを開催しました。

はじめに、本学の川添堯彬理事長・学長から開会のあいさつがあり、その後、4名の講師からご講演をいただきました。各先生のご講演の後には質疑応答があり、それぞれ活発なやり取りがありました。(講師の方々の氏名・講演内容は下記のとおり)

最後に、本学の田中昭男副学長から閉会のあいさつがあり、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。当日は、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士などの歯科医療に携わる方のほか、歯科医療に関心を持つ社会人、高校生のご参加をいただきました。ご参加いただいた方に御礼申し上げます。

今後、医療保健学部においては、多職種が連携するチーム医療にも参画できる高度な専門知識・技能、治療への熱意、患者さん目線の思いやりを併せ持った口腔保健学士(歯科衛生士)・口腔工学士(歯科技工士)を輩出していく所存ですので、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



◆小正 裕 <大阪歯科大学副学長>

「超高齢社会における新しい歯科医療人の活躍」

全身の健康とお口の健康の関連性を軸に、口腔リハビリテーション、多職種連携及び訪問歯科診療というこれからの歯科医療人の活躍の場について解説

◆鈴木 真弥 氏 <シロナデンタルシステムズ株式会社>

「デジタル歯科医療の新世界」

バーチャルペイシエント(動く患者さん)での診査診断から治療オプションへの拡がり

◆樋口 鎮央 氏 <和田精密歯研株式会社常務取締役>

「デジタル技術の活用で大きく変わる歯科医療」

技的立場から現状、同社で取り組んでいるCTシュミレーションからCAD/CAM 技工(切削&3Dプリンターによる製作)までの歯科医療技術の変革と環境を含めた技工の現状と展望

◆荒井 昌海 氏 <医療法人翔舞会理事長>

「歯科治療の最前線～歯科治療を変えるテクノロジーが働き方を変える～」CAD/CAMの発達は、技工士はもちろん、歯科医師たち、歯科業界の働き方をスマートに変えていく

2016年度オープンキャンパス

医療保健学部のオープンキャンパス(OC)は、学部設置認可申請中の6月19日に第1回を牧野学舎で開催したのを皮切りに、7月23日、同24日、8月12日、同21日、9月18日の計6回実施しました。4回目の8月12日は天満橋学舎で開催し、病院見学を中心に本学の充実した臨床施設・設備を間近に見ていただきました。8月21日は楠葉学舎にて歯学部と合同のOCとなり、歯科医療の現場で現役でご活躍の方々による体験講義や、キャンパスツアー等を行いました。そのほか体験実習など、日によってさまざまなプログラムを用意したOCは、リピーターも徐々に増え、終了後のアンケートでは、参加して歯科医療に興味を持ったという感想が多く寄せられました。次年度以降、OCにおいて学部の魅力をさらに伝えることができるよう、より一層内容の工夫に取り組んでいきたいと思っております。(OC参加者総数217名、うち学生数138名)



|| 2016年度 歯学部オープンキャンパス

2016年度は、7月から9月にかけて計4回[第1回:7月18日(月・祝)、第2回:8月12日(金)、第3回:8月21日(日)、第4回:9月25日(日)]開催し、参加者数は延べ517名(うち受験生等は249名)を数え、昨年に続き過去最高の入場者数となりました。実施内容としては、本学の入試概要説明、在学生による学生生活の説明、学生短期海外留学体験談、学内施設見学、実習体験、ミニ講義、個別相談会等を行いました。また第2回では天満橋学舎において、附属病院見学も含めたオープンキャンパスを実施し82名の参加がありました。またはじめての試みとして、受験予定者のニーズに応えるべく、第3回においては駿台教育研究所の石原センター長による講演を、第4回では駿台予備学校の現役講師による入試直前対策講座を開催しました。



|| 国際交流

山西医科大学と学生交流協定締結

●協定締結準備 2016.8.16

本学の代表団は、川添堯彬理事長・学長の代理として、岡崎定司国際交流部長、山本一世教授ならびに方教授が山西医科大学(中国 山西省)を訪問し、山西医科大学段志光校長との面談において、今後の両大学間の学生交流事業を深めることを確認し合い、学生交流協定締結の準備がなされました。また、岡崎国際交流部長、山本教授ならびに方教授に山西医科大学の客員教授の称号が授与されました。



●理事長・学長訪問・協定締結 2016.11.15

学生交流協定締結のため、川添理事長・学長ならびに方一如教授が山西医科大学を訪問し、学生交流協定書への調印式が執り行われ、川添理事長・学長と山西医科大学段志光校長が調印し、協定が締結、本学と山西医科大学との交流の幕開けとなりました。この調印式において、今後、両大学間の学生交流事業を充実させることを誓い合いました。また、名誉客員教授授与式が執り行われ、段志光校長から、川添理事長・学長へ山西医科大学の名誉客員教授の称号が授与されました。



学生短期海外研修報告①
シドニー大学歯学部

欠損歯列補綴咬合学講座
講師 山本さつき

研修期間：2016年8月13日(土)～

2016年8月22日(月)

研修場所：オーストラリア・シドニー

研修先：シドニー大学歯学部および関連施設

参加者：3年・井上彩、紀乃定紘子、水川義也、
水野祐子、5年・日野志保

引率者：山本さつき

1日目：2016年8月13日(土)

15:30に関西国際空港に集合。岡崎教授と庶務課青山さん、参加学生5名と引率の山本が集合し、岡崎教授より研修中の心がけなどをご指導いただき、セキュリティチェックと出国審査を通過した。夏休みの最繁忙期ということもあり、審査に少し時間がかかったが16時過ぎには出国ゲートを通過した。搭乗を予定していたCX507便は20分ほど遅延し、18:20に離陸した。21:30に乗り継ぎの香港に到着し、再度セキュリティチェックをうけ、乗り継ぎゲートに到着するも、搭乗予定のCX101便が1時間遅延したため、香港時刻の1:00に離陸した。

2日目：8月14日(日)

香港出発が1時間遅れたため、シドニー到着は12時過ぎであった。入国審査後スーツケースをピックアップし税関を通過した。

到着ゲートで日本旅行の現地スタッフと13:10頃にお会いできた。その後、車でホテルまで送っていただき、車中シドニーでの注意事項と情報などを頂いた。13:45にホテルに到着。15時にロビーに全員集合し、所在地の周辺の地理を確認するためにホテル周辺を散策し日用品の買い物などを行った。

その後、事前に学生同士で連絡を取っていたシドニー大学の学生たちと18:30にホテルのロビーで集合した。夕食には

12月に大阪歯科大学に来る予定の4人の学生とその他3人の学生が参加してくれた。夕食場所はホテルから徒歩15分ほどのダーリングハーバーエリアで、初日からホテル周辺とシドニー中心部の位置関係を把握することができた。参加したシドニー大学の学生たちは2014、2015年にシドニーへ来た大阪歯科大学の学生とも交流したという学生が多く、初対面ながらスムーズに交流できた。

3日目：8月15日(月)

8:40にホテルロビーに集合。現地学生2名がホテルのロビーまで迎えに来てくれた。2人の案内でSydney Dental Hospital(SDH)に到着。9:00にロビン・ワトソン先生とSDH1階ロビーでお会いし、ご挨拶をした。簡単に病院内を案内していただき、9:30より歯内治療の模型実習を見学し、3年生の臨床実習やPBL(補綴の治療計画についての討論)の様子を見学した。また、技工室や小児歯科なども見学させていただいた。昼食をワトソン先生とシドニー大学学生たちととった後、電車でシドニー北部にあるSirona Dental Facilityの見学に行った。スタッフの歓迎とお茶がふるまわれ、クリニックのクリーンルームシステムやCT、レントゲン機器、口腔内カメラや光学印象システムが付属したデンタルチェアの説明を受け、CAD/CAMによるクラウン作製のデモを見せていただいた。学生たちはCAD/CAMの機器を実際に見たことがなかったようで、光学印象や削り出しのデモに興味深そうに見学していた。



見学後、ワトソン先生の引率で移動し、

ホールタウン駅にて下車。ショッピングモールを教えていただき、ワトソン先生とは別れ、少し周囲を歩いたあと、ホテルに戻った。18:30頃、12月に大阪歯科大学に来る予定の2人の学生と他1人の学生とでホテルロビーで待ち合わせて夕食を一緒にとった。その後、オペラハウスとハーバーブリッジのあたりを案内していただいた。

4日目：8月16日(火)

この日は9:30からWestmead Center for Oral Health ツアーの予定であった。9:20に駅の改札でワトソン先生と待ち合わせて病院に向かった。病院の図書館や講義室をはじめ診療室を見学し、11時よりシドニー大学の教員や学生たちと交流する「Morning tea」を開催していただいた。こちらにはChris Peck 学部長も参加していただき、本学からのお土産を手渡し、ご挨拶をさせていただくことができた。その後、Chris Peck 学部長より1996年に始まったこの大学間の交流についてお話しいただき、今後ともよい関係を継続したいという旨のお言葉をいただいた。

午後の予定はフリーだったため、学生たちがタロンガ動物園に行きたいと言っていることを伝えるとワトソン先生も同行していただけるとのことで、速やかな移動ができ、時間を有効に使うことができた。動物園からフェリーでサーキュラーキーに帰ってきた後、ワトソン先生とは別れ、サーキュラーキーでの日没を鑑賞し18:00ごろホテルに戻った。夕食はシドニー大学の学生3人とホテルの近くで中華料理を頂いた。

5日目：8月17日(水)

この日はSDHでシドニー大学学生の実習を見学した。午前は学生が行う歯周治療(ポケット検査、スクレーピング、ルートプレーニングや清掃指導など)の臨床実習と2年生の問診、診察と歯周ポケッ

ト検査の相互実習を2班に分かれて見学した(3人に分かれて途中交代)。見学終了後、ワトソン先生とシドニー大学に移動し、大学内のカフェで昼食をとった。



その後ワトソン先生の案内でシドニー大学の見学を行った。古くからある校門や校舎と常設の美術館を見学した。シドニー大学の売店でお土産などを買い、17:00にワトソン先生と別れた。その後は各自自由行動とし、思い思いの時間を過ごした。

6日目:8月18日(木)

この日はWestmead Center for Oral Healthで臨床見学の予定だった。セントラル駅から予定していた電車に乗ったが30分ほど遅延し、見学の開始が10時過ぎからとなった。待ち合わせしていたワトソン先生が乗った電車も同様に遅延していたため、お待たせすることはなかったが、研修予定が少し変更となった。この日はレジン充填や歯内治療を3年生が患者に対して行う臨床実習を見学した。ワトソン先生から学生でも教員でも自由に質問してよいと言われ、学生たちは頑張って質問して実習内容を理解しようとしていた。中には口腔内をミラーで見せていただいた学生もいて良い経験をさせていただいた。

午後からはWestmead Children's Hospitalの見学で、その前にPedo Dept.のSally Hibbert先生より病院の概要を説明していただいた。その後、病院に移動し、

元職員でボランティア職員であるPaul Wilsonさんに病院のツアーをしていただき、成り立ちや歴史を説明していただいた。この日の帰りはワトソン先生の同行でフェリーにてシドニー市内に戻ることにした。18時にサーキュラーキーに到着した後は自由行動とし、各自で買いものと食事をとった。

7日目:8月19日(金)

この日は8:30よりWestmeadでDr. John Pearsonの講義を受けた。講義の内容は即時義歯についてであり、補綴学を未履修の3年生には少し難しい講義のようであったため、午後は学生の希望でWestmead Center for Oral Healthの矯正で臨床見学をさせていただいた。



夜はシドニー大学学生たちがホームパーティーを開催してくれたので、Paramattaの学生宅を訪問した。本学学生も研修が終了した安堵感や、現地学生に慣れてきたこともあってか、十分に打ち解けて交流していた。

8日目:8月20日(土)

この日は一日自由行動だったため、8月10日の壮行会時に学生たちに土曜日の過ごし方を考えておくように伝えておいたところ、ブルーマウンテンと鍾乳洞の観光に行きたいという提案をうけていた。ブルーマウンテンの見学は公共の交通機関でも行けそうであったが、鍾乳洞はアクセスが悪く、車でないと無理のようであったため、シドニー大学学生に相談したところ、車を二台用意してくれて、6人の学生が1日観光に同行してくれた。彼らのおかげで8:30にホテルを出発し、ジェノランケイブとブルーマウンテンの

観光を行い、18:00に市内に戻ってくることができた。その後、2人の学生がかわり、ダーリングハーバーの花火を鑑賞した後、皆で夕食をとった。

9日目:8月21日(日)

この日はホテルを10:00にチェックアウトし、荷物はホテルに預け、11:00からオペラハウスの内部を見学できるツアーに参加した。その後、3人のシドニー大学学生の案内でボンダイビーチに行き、海の見えるロケーションの良いレストランで昼食をとった。その後、ビーチの散策を行い、18:00にホテルに戻り、ツアーガイドの方の案内で18:30に空港へ向かった。ガイドの方から搭乗の説明とtourist refund schemeの説明を受け、19:00過ぎに出国した。予定通り、21:55発のCX138便で香港に向かった。

10日目:8月22日(月)

予定通り、5:15頃に香港に到着。11:30香港発のCX568便に搭乗し、16:10頃に関西国際空港に到着した。出国審査後、手荷物を受け取り、税関を通過し、16:50頃解散した。

感想

今回の参加学生は3年生4人と4年生1人でした。シドニー大学での研修は臨床見学が多く、前期でほぼユニットを完了している4年生は臨床で行っている内容を理解して見学している様子でした。学生たちはそれぞれ現地の学生や教員とコミュニケーションを頑張ってとろうと努めているように見えました。教員および学生たちは私達に対してゆっくりかつはっきりとわかりやすい単語を選んで会話してくれたため交流はスムーズに行えたと感じました。学生たちは皆、帰国の際に「帰りたくない」と口々に言っていたので、今回の研修は彼らにとって満足できるものだったと思います。

また、今回の研修の成功要因として、



シドニー大学の研修担当のワトソン先生とシドニー大学の学生たちの多大なるご尽力が挙げられます。ワトソン先生は研修中も「何かしたいことはある?」「どこか見たい所はある?」などと常に聞いてくれて私達の研修をより有益なものになるようにとご配慮してくださいました。また、初めてで不慣れな土地でスムーズに移動できるように出来る限り付き添って行動してくださいました。そして、シドニー大学の学生は「ランチはどうするの?」「今日の予定は?」などと積極的に聞いてくれて、研修以外の時間でも交流できる場を作ってくれました。彼らの協力なしではここまで有意義な研修にはならなかったでしょう。次回、シドニー大学より学生が来られるときは、私達が精一杯のおもてなしをしなければならぬと感じております。また、シドニー大学の学生は卒業後すぐに歯科医師として働けるとのこと(国家試験はなし)で、行っている実習も本学の学生実習よりも卒直後の臨床研修のほうが近いと感じました。彼らが来日した際は、卒直後の臨床研修医や病院医員とも交流ができる機会もあればいいかと思いません。

最後になりましたが、今回の研修は事前にご準備いただいた本学の国際交流部委員会の先生方、大学庶務課の皆様、シドニー大学のスタッフの皆様による多くのご配慮のお蔭で、大きなトラブルも無く遂行することができました。皆様のご尽力に感謝いたしますとともに、このような機会を与えて頂きました本学理事長・学長、国際交流部の先生方にお礼を申し上げます。

学生短期海外研修報告② コロンビア大学歯学部

歯科矯正学講座
准教授 西浦亜紀

研修期間: 2017年3月11日(土)～
2017年3月21日(火)

研修場所: 2017年アメリカ・ニューヨーク
研修先: コロンビア大学歯学部および関連施設

参加者: 5年・赤松佑莉奈、穴田理嵯、亀山暁子、
西口雄祐、根本直人、濱田翔央、村上明希
引率者: 西浦亜紀

1日目: 2017年3月11日(土)

早朝 6:30 に伊丹空港 北ターミナル国内線 1 階団体カウンターに、岡崎教授と庶務課の下田さん、参加学生 7 名と引率の西浦が集合し、岡崎教授より研修中の心がけ注意事項などをご指導いただき、セキュリティチェックを通過した。8:00 JAL3002 便にて成田国際空港へ出発、9:20 に成田空港に到着した。セキュリティチェックと出国審査を通過後、11:00 成田発ニューヨークケネディ国際空港着の JL006 便に搭乗し、ニューヨー



クへ向けて出発した。

3月11日(土)

10:00 にケネディ国際空港に到着し、入国審査後、スーツケースをピックアップし、税関を通過した。11:15 に空港出口で日本旅行 NY 支店の担当者の方と合流し、バスにて空港からホテルに移動した。土曜日ということもあり渋滞はなく、空港から宿泊ホテルである Days Inn Hotel Broadway までは約 40 分で移動することができた。12:00 過ぎにホテルに到着したが、チェックインできるのが 15:00 であったため、荷物を預けて所在地周辺の地理を確認するため、ホテルを出た。地下鉄の IC カードを購入し、地下鉄でタイムズスクエアまで行き、昼食後ブロードウェイミュージカル「Phantom」



のチケットを購入した。気温が -6℃ と、日本を出発するときの情報より低く、散策ができる気温ではなかったためスーパーマーケットに寄った後ホテルに戻った。夕食はホテルの向かいのカフェレストランでとった。

2日目: 3月12日(日)

ホテル出発前に、明日からの研修予定、持ち物、交通などを確認したのち、ホテルを出発した。ニューヨーク近代美術館 (MoMA) に向かう途中、話題のトランプタワーを発見し、タワー前で写真を撮影した。約半日美術鑑賞を行い、その後はグループに別れて街の散策を行った。夕食は集合し、ブロードウェイ近くのファーストフードステーキハウスでステーキを食べ、徒歩 5 分の場所にあった

Top of the Rock からニューヨークの夜景を見た後、地下鉄でホテルに戻った。

3日目:3月13日(月)

10:30にDr.Salentijnの部屋で待ち合わせだった。初めて乗る(地下鉄)線を使うこと、また院内が迷路のようでわかりにくいとの益野先生からの情報があったため早めに行動した。附属病院はホテル最寄り駅の96 street stationから168 street stationまで地下鉄に乗り、セキュリティを通過後部屋に着くまでに5人程の人に道を聞き、約束の15分前に部屋に到着した。今回は益野先生が事前にDr.Salentijnよりproof letterをいただいていたので、セキュリティは予想よりもスムーズに通過することができた。

Dr.Salentijnから約1時間をかけて院内地図、5日間のスケジュール、研修のグループ分けの説明があり、また院内研修に必要な書類を作成した。特に興味のある分野は、期間の後半で集中的に見学することも可能とのことだった。翌日の火曜日は大雪が降るとの天気予報により、附属病院が閉院になるとのこと。また翌日は外出できないという情報もいただいた。

学長のDr.Stohlerがいらしたので、ご挨拶をし、学長先生とDr.Salentijnと一緒に記念写真を撮った。学長先生が満面の笑みで、「明日は雪が振って病院が閉まるので、セントラルパークで雪遊びをしたり、ショッピングに行ったりする絶好の一日だよ。楽しんでね。」とおっしゃったが、明日の状況が全く予測・判断できなかったため、それがジョークなのか本当なのかわからず、曖昧な返事しかできなかった。午後の臨床見学の際、有給の先生にその話をし、実際の予想される状況を尋ねたところ、翌日、お店はほぼすべて閉まり、タクシーも通らず、外出できる日ではないと教えてもらった。

13時から診療見学を開始した。各フロ

ア入り口でディスプレイのガウンを着用し、診療フロアに入るシステムになっていた。病院9階はspecialty programのフロアで、補綴科、歯内治療科、歯周病科、矯正歯科、インプラント科があった。2名が3グループと、残り1名で補綴、歯内治療、歯周病、矯正に分かれて午後の見学を行った。



補綴科の非常勤講師Dr. Budasoffは非常に親切で、穴田さんと西口さんに、ラップトップ上で審美補綴のプチレクチャーをしてくださった。補綴科のDr.Anthonyも若いDr.に指示をしながらも我々のことも気にかけてくれて、いろいろと説明をしてくださった。根本さん、村上さんは歯周病科の非常勤講師のDr.Segelの手術見学をさせていただいた。赤松さんは歯内治療科の日本人レジデントのDr.Kamuraの見学をさせていただいた。亀山さんと濱田さんは矯正歯科を見学し、Dr.Kimからアメリカと日本の矯正事情の違いなども聞かせていただいた。

17時に病院を出て、翌日の買い出しのため、スーパーを2件まわった。レジは大変混んでおり30分以上かかった。買い物を終え、ホテルに戻れたのが21:00前。ホテルの近くのイタリアンレストランで夕食をとった。

4日目:3月14日(火)

天気予報通り、一面雪が積もっており、車もほぼ通っていない状況であった。濱田さんが部屋を提供してくれたので、各自椅子を持参し、昨日買い出しをしたもので昼食と夕食をとった。その他の時間は、各自部屋で自由に過ごした。

5日目:3月15日(水)

附属病院7階は歯学部4年生、8階は歯学部3年生が実習する階である。8階には常勤講師が多数配置されており、常勤講師と非常勤講師が3年生に診療を教えている。7階はすべて非常勤講師が日替わりで診療を教えにきているそうである。

午前9時より研修を開始した。午前9階で見学・研修・診療補助をした。歯周病科の常勤教員Dr.KangとレジデントのDr.Changiがいろいろと世話をしてくれた。Dr.Salentijnより7階の非常勤講師のDr.Mirskyを頼るようアドバイスを受けていたので本学学生数人の研修をお願いした。お昼はピザパーティが開催された。大きなピザと飲み物を用意していただき、学生やレジデント、日本に交換留学生として来る予定の大学1年生Gabrielさんが参加した。Gabrielさんと連絡先を交換し、交流を深めた。

午後は3年生が実習する8階で見学・研修・診療補助を行った。コロンビア大学の臨床実習では、学生が診療行為のほぼ全てを行い、講師はそれをサポート、指導するスタイルであった。本学学生のバキューム補助やセメント練などはコロンビア大学の学生にとっては非常に助かっていたようである。場合によっては本学学生に処置をさせてくれることもあった。



Dr.Salentijnは木曜日と金曜日は出張で大学にはいらっしやらないということで、17時前に副学長室で集合し、一人一人certificateをいただき、全員で記念撮影を行った。

夜はブロードウェイでミュージカル「Phantom」を観賞した。

6日目:3月16日(木)

午前9時から基本的には8階で研修を行った。本学学生は病院に慣れてきたようで、1人で研修をするもの、2人でするもの、それぞれのスタイルができてきた。9階のレジデントプログラムでは7、8階よりもより専門的な診療をしているので、本学学生にとっては非常に興味深いようであった。特に歯内治療科には日本人のレジデントと日系人のレジデントが在籍していたため、日本語で診療のこと、アメリカでの生活、アメリカの歯科医師事情などを聞くことができ、有意義であった。また全チェアへの備え付けられている顕微鏡を使い、根管を覗かせてもらう機会も得て、本学学生はさらに歯内治療に興味を持ったようである。

午後は各自見学したい階、科に赴き、研修を続けた。学生自身が行うインプラント手術見学、補助もさせてもらえ、「学生がインプラントを埋入する」現場を目の当たりにした本学学生にとっては刺激的な午後だったようである。

17時に附属病院を出て、地下鉄で数駅離れたコロビア大学メインキャンパスに向かい、大学構内を見学した。大学のシンボルの一つであるロウ記念図書館前のAlma Mater像、ロダンの銅像「考える人」前で写真撮影を行った。夕方はお世話になったレジデント達とともにホテル近くのCarmine'sというイタリアンレストランで夕食をとった。レストランはレジデントが提案してくれた場所で、観光客らしき人はおらず、アメリカの雰囲気堪能できた。

7日目:3月17日(金)

午後はDr.Salentijnと学長先生の勧めで、5th アベニューの44streetから始まり、77streetまで続くアイリッシュのお祝いであるセントパトリックデイのパレードを見に行くことになっていたので研修は午前中のみであった。

矯正歯科見学予定だった穴田さんは、

朝9時から約1時間、矯正歯科のレジデントと教授、講師による症例カンファレンスに参加させてもらえた。カンファレンスのやり取りの様子が真剣で、刺激を受けたようであった。学生は9階、8階、7階それぞれ行きたい階に行き研修を続けた。



本学で再生医療の研究チームに参加している西口さんにとっては今回の研修で一番興奮する出来事が起こった。大学4年生のDanさんと仲良くなった西口さんは、コロビア大学には再生医療研究で有名な研究者Mao先生が在籍していることを話していた。最終日Danさんが附属病院の上層階にCenter for Craniofacial Regenerationの研究室があるので、見に行ってみようという提案をしてくれた。たまたまDr.Maoがおられ、Danさんが西口さんのことを説明すると、快く研究室に招き入れてくださり、見学をさせていただきました。最新の3Dプリンターを使った研究については担当研究者が説明をくださった。皆で記念撮影をし、お礼を伝え、退出した。

お世話になった先生達、学生さん達に挨拶をし、学長・副学長はご不在であったため、担当秘書さんに本学学生が書いた学長先生、Dr.Salentijn、1年生のGabriel宛のメッセージカードを託し、附属病院を後にした。

地下鉄でセントパトリックデイのパレードを見に行き、そのまま地下鉄で南下し、グランドゼロ、自由の女神を見て、イースト川をまたぎマンハッタンとブルックリンを結ぶ橋、約1.8kmのブルックリンブリッジを歩いて渡り、ブルックリンから見るマンハッタンのサンセット、夜景を見た。非常に寒い日であった

が、日本では見られない景色に一同感動した。

8日目:3月18日(土)

午前中は自然史博物館で過ごし、午後はSOHOエリアで買い物などを楽しんだ。

9日目:3月19日(日)

早朝からセントラルパーク南端のパンケーキ店に皆で行き、朝食をとった。朝食後、ニューヨークハーフマラソンを観戦することができた。その後メトロポリタン美術館で半日を過ごし、午後はお土産などを買うため、グループに分かれて行動した。最終日の夜はステーキハウスで夕食をとった。

10日目:3月20日(月)

9:45にチェックアウトし、10:00には迎いのバスに乗りケネディ国際空港へ移動した。13:15 ニューヨーク発JL005便は定刻通り離陸した。

11日目:3月21日(火)

16:35に成田空港到着。18:20成田空港発伊丹空港行きJL3007の出発が約1時間遅れたため、伊丹空港に到着したのは21時前であった。各自荷物をピックアップし、解散した。

感想

本学学生は英語や病院の雰囲気慣れるにつれ、積極的な行動ができていた。アメリカと日本の歯科診療報酬の違い、保険制度の違いなど、歯科事情が大きく異なるところもあり、彼らは日本にいるときには気付かないことも経験でき、視野が広がったように感じる。またアメリカの歯学部生は、一般的に1、2年生の時に基礎科目(Part1)と臨床科目(Part2)の国家試験に合格し、その後3、4年生で臨床実習を行う。臨床実習では全ての処置を学生が行うことができる。

ニューヨーク州では、歯学部卒業時の実技試験 (Part3) は免除されているようで (州によって法律が違うため、必要な州もある)、卒業後はすぐに歯科医師として働くことができるそうである。そのため、学生達は日本の卒後研修もしくはそれ以上の治療を行っていた。また4年生の学生と話をしている時に「これは今読んで本で、歯周病を勉強するにはとても良いテキストだよ。」とハードカバーの分厚い本を見せてくれて、彼のラップトップに入っている最近のトピックスの

論文も見せてくれた。本学学生も卒業まであと1年という同じ立場であったが、読んでいるテキスト、勉強の深さ、その手段の違いに衝撃を受けていた。

このような体験から、今回参加した学生は、国家試験合格をゴールにするのではなく、合格後に海外留学も含め、どういう勉強をしていきたいか、どういう歯科医師になりたいか、そのためには何が必要かなど、具体的な近未来の自分を想像することができたのではないと思う。

最後に、今回の研修を事前にご準備いただいた本学の国際交流部委員の先生方、大学庶務課の皆様、副学長のDr.Salentijn 始めコロンビア大学のスタッフの皆様のご配慮のおかげで大きなトラブルもなく海外研修を遂行することができました。皆様に感謝申し上げます。また、私にとってもこのような貴重な機会を与えてくださいました本学理事長・学長先生、国際交流部の先生方にお礼を申し上げます。

|| 平成 28 年度 大阪歯科大学卒業式

平成 28 年度大阪歯科大学卒業式と大学院学位認証式が、平成 29 年 3 月 10 日 (金)、楠葉学舎講堂で行われました。川添理事長・学長が卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記を授与し、大学院修了者には各指導教授が博士 (歯学) の学位記を手渡しました。学生たちは共に学んだ仲間と卒業の喜びを分かち合い、これまで支えてくれたご家族への感謝を胸に、晴れやかな表情で旅立ちました。

理事長・学長 式辞 理事長・学長 川添 堯彬



奈良時代から実に 1200 年もの間、営々とつづく、東大寺二月堂のお水取りの行事は、今月 1 日から始まり 3 月 5 日の啓蟄を過ぎてもおお続きしており、来週の 15 日の水曜日にいよいよ満行日の修二会を迎えます。周辺の梅林も今、満開で、春の到来がすぐそこに感じられるこの頃でございます。

本日、まさにこの春の近い良き日に、第 65 回大阪歯科大学卒業式を迎えられます 81 名の新歯学士諸君並びに第 53 回大学院学位認証式を迎えられる 25 名の新博士の皆さん、本日は誠におめでとうございます。同時に、本席にご臨席いただきました保護者・ご家族の皆様におかれましても、ひとしおの感慨に胸を膨らませておられることと拝察いたします。

さて、新歯学士の皆さんに申したいと思います。皆さんは間もなく難関の国家試験に見事に合格されて歯科医師になれるわけでありますが、これからさらに国で決められた 1 年間の臨床研修で研鑽する義務があります。その後は大学院博士課程への進学や、社会人歯科医師として、各分野に分かれて活躍していただくこととなります。それぞれに使命感ややりがいを見つけてくれるものと思います。

本日ここに卒業式を迎えられた新歯学士の皆さんは、6 学年の最終課程を精一杯勉学に励み、目覚しい成績を上げられた精鋭揃いの方々であることを担当教員共々と私はよく知っています。

そのような方々へ、これからの人生に立ち向かう心がまえについて、明治維新の立て役者となる多くの若者を育成された吉田松陰先生の教え「土規七則」の中からまず第一の目標として 3 つの言葉を贈りたいと思います。

1 つ目、入学時に次いで、再び目標・志しを立てることを最優先事項とすること。

2 つ目、良き友との交友を継続して行動や考え方の助けとすること。

3 つ目、読書や研修会によって故人、賢人の教えを学ぶこと。

第二の目標は、できるだけ交友もこれからは海外諸国に目を向けてほしいことでもあります。それはコミュニケーションのための英語力・留学の助けにもなりますし、また視野の拡大にもつながります。あるいは将来の私たちの活躍の場もグローバルに見い出せるかもしれません。

そして第三の目標は、従来よりもっと患者さんに喜んでもらえるような歯科医療を探索し、実行してほしいのであります。患者さんに限らず、できるだけ多くの人々から生涯にわたって真に信頼される、そんな歯科医師になってほしいと思います。

次に、めでたく大学院を修了された新博士の皆さんへ申したいと思います。歯学部を卒業後、さらに上級のコースへ進まれ、勉学意欲、研究意欲に燃えて、ここまでの苦労や努力に耐えてこられ、このたび見事に「博士」の学位を授与されました。このご苦労の成果を、皆さんのこれからの各自の職業人生や、あるいは研究人生においてさらに磨いていただき、各分野の歯科界のトップランナーになっていただきたく、存分に活躍してい

ただくことを祈念します。

そしてさらに期待したいことは、皆さん方は恵まれて、また幾多の努力を経てここまで進んでこられた、まさに国の宝となるエリート人材であります。今後の方向として、できましたらお一人でも多くの方が大学に帰ってきて、将来、教育研究機関の「教授」になっていただき、次世代の教員人材を多く育ててもら道を期待します。あるいは別の道として、直接に患者さんに喜んでもらえる「イノベーション治療法」を開発することも大学院卒の重要な役割であると思います。

来賓祝辞

大阪歯科大学同窓会会長 生駒 等



平成 28 年度大阪歯科大学卒業式並びに大学院学位認証式に際し 9,000 余名の同窓会会員を代表してお祝いを申し上げます。

6 年間の学業を終えられ、めでたく卒業の日を迎えられました歯学士の皆様、そして長年の大学院での研究を終えられ、博士(歯学)の認証を得られた皆様のご努力に対して、心から敬意を表し、お祝いを申し上げます。また、本日まで深い愛情と大きな期待をもって、ご子息・ご息女をお育てになられたご父兄の皆様に、深甚なる敬意を表すると共に、心からお喜びを申し上げます。

楠葉学舎で友人と共に学ばれた多くの思い出と、さらに天満橋学舎で学ばれて、新たなる大阪歯科大学同窓会の伝統を作り上げていかれる皆様を、第 65 回生として同窓会にお迎えできることを大変嬉しく思っております。

そして将来、いつの日か、「博愛」と「公益」という究極の目標へ一歩でも近づいてほしいのであります。同時にこの大学の力を一段と高めていただきたいと願



入学されて 6 年間、良いことも、悪いことも含めて青春時代の思い出は、皆様にとって大切な宝物になるでしょう。これからの人生において、努力した結果が必ずしも良い結果に結びつくものとは限らないことを経験することもあるでしょう。むしろ結果が出ないことのほうが多いのですが、努力は必ず報われます。目標に向かって努力することこそ、自分に自信をもつことに繋がります。「努力した者が成功するとは限らない。しかし、成功する者は皆努力している」ベートーベンの言葉です。

臨床研修を終えたのちは、是非、同窓会活動に参加して切磋琢磨して成長してください。皆さんは大学 65 回生として 4 月から自動的に同窓会に入会されます。時には、いがみ合うこともあるかも知れませんが、生涯同じ価値観をもつ同士として、励まし合い友情をたもつことが、第 65 回・クラス会の絆であると思います。

大阪歯科大学同窓会は、全国各都道府県の支部会と各クラス会を縦の糸、横の糸として 100 年の命の輪を紡いできました。母校を支え、母校愛に誇りをもって、先人が築き上げてこられた「大歯魂」の下に、全国の各歯科大学同窓・校友会のどこよりも強い連帯・団結を持ち続けています。

いたしております。

以上、新歯学士と新歯学博士の皆さんへの理事長・学長式辞といたします。



コンピュータが出現してから 70 年しかたっていないのに、1970 年後半に登場したパソコンに始まり、それがネットワークと繋がり、その進化は目覚ましく急速で、今ではソーシャルネットワークを生み出し、スマートフォンのニュースアプリを使用して、世界中の情報にたどりつくことが出来ると同時に、自分の情報を世界中に発信することが出来る時代に皆さんは生きています。しかし、インターネットが作り出したグローバル化によって、失われていくものが存在することも確かです。グローバル化により従来の常識、道徳観、倫理観も変化することもあれば、長い時間をかけてゆっくりと変化していくかもしれません。仕事だけでなく、人間関係や家族関係も変化していくことに少し戸惑いもあるかもしれません。

同窓会は、その時代、時代の成功より、失敗の方が多く混沌とした生活の失敗経験が成功の道であること。失敗の価値が極めて大きいことを仲間と共に語り合うことができる組織です。古来より「君と一夕の話、読むに勝る十年の書」といい、友と一晩語り合うことは、十年の読書より有益である。十年読書し勉強したことよりも一晩、友と語るほうがずっと良いと言われています。

大阪歯科大学同窓会も2020年東京オリンピック開催年に同窓会設立100周年を迎えます。皆さん、3年間新しいことにチャレンジして、新鮮な息吹を同窓会にそそいでください。

最後になりましたが、大学院を卒業された皆さんは長年の研究を通して色々と体験やご苦労があったと思いますが、研究成果と共に貴重な経験を得られたことと思います。今後はその成果をもって自己研鑽し、大学の発展に貢献されるように期待をいたします。卒業生の皆さんが同窓会会員として社会において素晴らしい活躍をされること、そして大阪歯科大学が今後とも歯科大学の雄として発展されることを祈念して祝辞といたします。



|| 学位・博士(歯学)授与

中田 貴也 甲第788号 平成29年3月10日
The expression of 11 β -hydroxysteroid dehydrogenase type 1 is increased in experimental periodontitis in rats (ラットの実験的歯周炎において11 β -hydroxysteroid dehydrogenase type 1の発現が増加する)

伊東 優樹 甲第789号 平成29年3月10日
Influence of plasma treatment on surface properties of zirconia (プラズマ処理がジルコニアの表面性状に与える影響)

福本 貴宏 甲第790号 平成29年3月10日
Stomatognathic Function during Continuous Physical Activity in Nippon Kempo (日本拳法の連続運動時に認められる顎口腔機能)

中川 修佑 甲第791号 平成29年3月10日
Effects of taper and space settings of telescopic Ce-TZP/A crowns on retentive force and settling (Ce-TZP/Aを用いたテレスコープクラウンのテーパ角と内外冠のスペース設定が維持力および沈み込み量に及ぼす影響)

岡本 知子 甲第792号 平成29年3月10日
Effect of cyclic compressive loading on redifferentiation of human chondrocytes in three-dimensional cultured tissue (ヒト軟骨細胞由来三次元培養組織の軟骨再分化に及ぼす繰り返し圧縮負荷刺激の効果)

古澤 一範 甲第793号 平成29年3月10日
Sealing Ability of Enamel Crack using Various Dentin Desensitizers (エナメル質の微細亀裂に対する各種知覚過敏抑制材の封鎖性)

森 友理恵 甲第794号 平成29年3月10日
Reliability of distance measurements in dental CBCT images (歯科用CBCT画像の寸法安定性について)

細山 有規子 甲第795号 平成29年3月10日
Effects of gallotannin on osteoclastogenesis and the p38 MAP kinase pathway (破骨細胞形成とp38 MAP kinase経路に対するGallotanninの影響)

安井 大樹 甲第796号 平成29年3月10日
HGF/c-Met induces cell migration of oral squamous cell carcinoma via lamellipodin (HGF/c-Metはlamellipodinを介して口腔扁平上皮癌細胞の細胞遊走を誘導する)

安積 瑛子 甲第797号 平成29年3月10日
Gene expression profiles of early chondrogenic markers in dedifferentiated fat cells stimulated by bone morphogenetic protein 4 under monolayer and spheroid culture conditions in vitro (単層あるいはスフェロイド培養下においてBMP-4によって刺激された脱分化脂肪細胞の初期軟骨マーカー遺伝子の発現挙動)

小林 信博 甲第798号 平成29年3月10日
Porous Alpha-Tricalcium Phosphate with Immobilized Basic Fibroblast Growth Factor Enhances Bone Regeneration in a Canine Mandibular Bone Defect Model (イヌ下顎骨欠損モデルにおいて塩基性線維芽細胞増殖因子を固定させた α -リン酸三カルシウム多孔質体は骨再生を促進させる)

山本 翔一 甲第799号 平成29年3月10日
Evaluation of environmental change in the mouth with the use of spray-type oral moisturizer containing γ -PGA (γ -ポリグルタミン酸配合保湿スプレーの口腔内環境の変化についての検討)

山脇 勲 甲第800号 平成29年3月10日
Effects of glucose concentration on osteogenic differentiation of type II diabetes mellitus rat bone marrow-derived mesenchymal stromal cells on a nano-scale modified titanium (ナノレベル表面構造制御チタン金属上におけるII型糖尿病モデルラット骨髓由来間葉系間質細胞の硬組織分化誘導にグルコース濃度が及ぼす影響)

白井 翼 甲第801号 平成29年3月10日
Change of Cytotoxicity Level by the Addition of Nanomaterials (ナノ材料の添加による細胞毒性レベルの変動)

栗岡 香美 甲第 802 号 平成 29 年 3 月 10 日
Differential expression of the epithelial mesenchymal transition factors Snail, Slug, Twist, TGF- β , and E-cadherin in ameloblastoma (エナメル上皮腫における上皮間葉転写因子 Snail, Slug, Twist, TGF- β , E-cadherin の発現)

稗田 彩人 甲第 803 号 平成 29 年 3 月 10 日
In vivo bioactivity of porous polyetheretherketone with a foamed surface (ポリエーテルエーテルケトン多孔体の表面発泡処理による in vivo 生体活性)

北尾 徳嗣 甲第 804 号 平成 29 年 3 月 10 日
Processing of Ceramic Blocks Using Femtosecond Lasers (フェムト秒レーザーを用いたセラミックブロックの切削)

山本 真由 甲第 805 号 平成 29 年 3 月 10 日
Analysis of gaze points for mouth images using an eye tracking system (アイトラッキングシステムを用いた口元写真に対する注視点分析)

麥田 菜穂 甲第 806 号 平成 29 年 3 月 10 日
Comparison of the use of tablets containing a cysteine protease actinidin and tongue brushes for reduction of the bacterial load on the tongue (システインプロテアーゼであるアクチニジンを含むタブレットと舌ブラシを比較したときの舌背上細菌数減少について)

松下 巧 甲第 807 号 平成 29 年 3 月 10 日
Expression of Grhl2 and Its Target Gene Products in Developing Mouse Submandibular Gland (マウス顎下腺発生過程における転写因子 Grhl2 とその標的遺伝子の発現)

邱 秀慧 甲第 808 号 平成 29 年 3 月 10 日
Behavior of Trace Elements in Novel Apatite-ionomer Cement (新規アパタイトイオノマーセメント中の微量元素の挙動に関する研究)

邱 思瑜 甲第 809 号 平成 29 年 3 月 10 日
Influence of Porous Spherical-Shaped Hydroxyapatite on Mechanical Strength and Bioactive Function of Conventional Glass Ionomer Cement (多孔質球形ハイドロキシアパタイトが従来型ガラスイオノマーセメントの機械的強度およびバイオアクティブ機能に及ぼす影響)

安田 典泰 甲第 810 号 平成 29 年 3 月 10 日
Study of infection and malignant transformation of human papillomavirus in oral squamous cell carcinoma (口腔扁平上皮癌におけるヒトパピローマウイルスの感染と癌化に関する研究)

堤 義文 甲第 811 号 平成 29 年 3 月 10 日
Occlusal interference causes an increase in salivary protein (咬合干渉が唾液タンパク質の増加を引き起こす)

廣瀬 幹隆 甲第 812 号 平成 29 年 3 月 10 日
Bone augmentation of canine frontal sinuses by using a porous α -tricalcium phosphate for implant treatment (インプラント治療のためのイヌ前頭洞底挙上モデルを用いた α リン酸三カルシウム多孔体の骨増生)

小泉 孝弘 乙第 1603 号 平成 28 年 6 月 22 日
Analysis of swallowing dynamics by high-resolution manometry: Index correlated with swallowing pressure (高解像度マンOMETRYによる嚥下動態の解析 - 嚥下圧と相関する指標について -)

古森 賢 乙第 1604 号 平成 28 年 9 月 28 日
静置培養時と振盪培養時の *Rothia mucilaginosa* の遺伝子発現の比較

加藤 光司 乙第 1605 号 平成 28 年 12 月 27 日
Purification of a novel lectin from the dorsal spines of the stonefish, *Synanceia verrucosa* (沖縄産オニダルマオコゼの背鰭に由来するレクチンの精製)

岩城 太 乙第 1606 号 平成 29 年 3 月 22 日
Nicorandil inhibits osteoclast differentiation in vitro (破骨細胞分化過程におけるニコランジルの抑制効果)

|| 2016 年度 定年退職者

下記の皆さまが 2017 年 3 月 31 日をもって定年退職されました。定年を迎えるにあたり、5 名の方からお寄せいただいたご挨拶文を掲載いたします。

口腔病理学講座	主任教授	田中 昭男
英語教室	主任教授	佐ノ木幸夫
高齢者歯科学講座	主任教授	小正 裕
歯科東洋医学室	専任教授	方 一如
総合診療・診断科	専任教授	小出 武
歯科放射線学講座	准教授	古跡 孝和
口腔治療学講座	准教授	吉田 匡宏
臨床研修教育科	講師	小川 文也
大学事務局	事務局長	亀井 崇
中央歯学研究所事務室	主任	村上よし子
医事課	主任	鶴野 祥子
附属病院	歯科技工士	中辻 孝一

定年退職を迎えて

口腔病理学講座 主任教授 田中 昭男

2017 (平成 29) 年 3 月 31 日をもって大阪歯科大学口腔病理学講座の主任教授を定年退職しました。振り返ってみますと、1974 (昭和 49) 年 3 月に大阪歯科大学を卒業し、同年 4 月に大阪歯科大学大学院に入学し、病理学を専攻して恩師の筒井正弘先生に師事し、歯周病などの炎症性歯肉を用いて酵素組織化学的手法により研究を行い、炎症と酵素との関係を明らかにした学位論文をまとめ、歯学博士の学位を受領して 1978 (昭和 53) 年 3 月に大学院を修了することができました。

1978 年 (昭和 53) 年 4 月に口腔病理学講座の助手として採用して頂き、教育そして研究の極意を恩師から伝授して頂きました。研究を進めるうえで、歯科基礎医学会ならびに日本歯周病学会に入会して種々な情報を得ることを教わりました。



さらに関連学会にも入会するとともに学会発表も行っていました。当時、病理学を主とする学会は、医科の日本病理学会でありましたので、それに入会しましたが、口腔病理学に関する単独の学会はなく、基礎系歯科医学に関する学会はすべて歯科基礎医学会に集約されていました。しかし、世界的には国際口腔病理学会があり、それは1976年にアラバマ大学のProf. Harold M. Fullmerを中心に設立され、第1回国際口腔病理学会大会が1981年にスウェーデンのイエテボリで開催されておりました。第2回大会は1984年6月にオランダのアムステルダムで開催され、その際に学会発表することができました。その1年後の1985年7月に筒井先生のご高配により前述のProf. Fullmerが所長を務めているアメリカ・アラバマ大学歯科学研究所に留学させて頂きました。アメリカでは医科歯科が相互協力により研究を行っており、横の連携が確立され共同研究しやすい環境にありました。当地では、自己免疫疾患のモデル動物を用いて Sjögren 症候群やリウマチについての研究を行い、1986年4月にセントルイスで開催された FASEB (Federation of American Societies for Experimental Biology) で発表する機会を得ました。その大会の演題数は6,000件を超え、参加者数も13,000名を超える大きな大会で複数の学会の集合の形態であり、毎年開催され、日本からも、世界中からも多くの研究者が参加、発表していました。学会発表の成果は、Journal of Oral Medicine and Pathology および

Journal of Rheumatology に公表することができました。留学の良いところは、研究面以外に、多くの人々と交流を広めることができることです。アメリカ人のみならず、メキシコ人やドイツ人、フランス人、さらに日本人とも友達になることができ、多くの友人ができたことは私の財産となっています。海外留学は30歳代半ばで経験しましたが、できるだけ若い時に経験することがその後の教育、研究、臨床病理の考え方や発展の仕方に大いにプラスになると考えられます。異文化や文化背景の異なる人々との交流によって得られる情報や考え方は、その後の人生にも大いに役立つものでありました。世界中に友人がいることは現地に行ったときに心強く、現に後述の大学へ海外視察をさせて頂いた時には彼らに随分とお世話になりました。

1988(昭和63)年6月に筒井正弘教授の後任として口腔病理学講座の主任教授に推挙して頂き、口腔病理学を担当させて頂きました。口腔病理学にとって教育、研究、臨床病理の3本柱が重要事項となります。教育と研究は喫緊の事項でありますので、学生教育に必要な解り易いテキストブックの作成に努力してきましたし、また、教科書編纂の主幹を務めさせて頂き、歯学生としての基本を押さえ、応用が利く内容を工夫し、口腔病理学の教科書が作成できたと自負しております。さらに歯学生用のみならず、コデンタル用の教科書の編纂にも携わることができ、教育資材を作成させて頂きました。さらに、是非行いたいと思っていたことは病理組織診断であります。附属病院の症例の病理組織診断を行い、臨床に貢献することでありました。すぐにはできませんので、附属病院のシステムを構築するために、病院にお願いする必要があり、機が熟すのを待つこととしました。

一方、研究については、自己免疫疾患や癌遺伝子・癌抑制遺伝子の発現を調べる研究を行い、学会発表を行っておりま

したが、外部の競争的研究資金の獲得も徐々に増え、大型の研究資金も獲得できるようになりました。とくに2010年には大型の科学研究費とハイテク・リサーチ・センター整備事業の同時採択などを受け、歯周組織疾患における細胞接着とサイトカインの解明や歯周組織再生などの研究を推進することができました。とくに歯周組織再生療法に用いられているエナメルマトリックスデリバティブから新規のアミノ酸シーケンスを同定することができ、特許も取得することができました。これを用いた研究を展開、発展させています。お蔭をもちまして2年ごとに一人ないし二人の大学院生が病理学を専攻して研究に従事してくれるようになり、多くの病理学専攻課程の大学院生を受け入れることができました。研究成果の多くは国際誌に発表することができ、また、大学院が始まって以来初めて大学設置基準の特例として設けられている、優れた成果を上げた者に対しては3年で修了できる制度の最初の該当者を輩出でき、しかも日本学術振興会の特別研究員にも選出されております。基礎系の大学院としては大学院生をかなり確保できているところであります。

学会活動で思い出深いのは、1990年7月に日本で第5回国際口腔病理学会が開催されることになり、その運営母体がない状態であったので、日本口腔病理学会が設立されたことでもあります。日本口腔病理学会の立ち上げの一人に入れて頂くことになりました。現在、日本口腔病理学会は、臨床の文字が入り日本臨床口腔病理学会と名称を変更されております。臨床では学会認定の専門医制度が確立されています。病理組織診断においても医科では日本病理学会が病理専門医制度を設けておりますが、口腔領域の病理組織診断に携わる口腔病理専門医も必要であるので、日本病理学会の中で認定されています。これを受けて、1994(平成6)年1月から大阪歯科大学附属病院

の病理組織検査を開始し、口腔外科等で切除された標本の診断を口腔病理学講座が実施することになり、附属病院検査室で切り出しから標本の作製が行われ、病理組織診断を口腔病理専門医が行っています。症例数は1994年1月～2016年12月までの22年間に2万件を超え、多くの症例を経験することができました。通常、よくみられる嚢胞の症例から粘膜や顎、唾液腺の良性腫瘍、悪性腫瘍、炎症性病変など多種多様な症例を見ることができ、中には極めてまれな症例もあり、難症例もありました。基礎系講座において唯一、附属病院における業務を担当させて頂きました。

1994年には海外視察をさせて頂き、オーストリア・ザルツブルグのLandeskrankenhausを皮切りに7か所の大学を視察しました。ザルツブルグで開催されたヨーロッパ頭蓋顎顔面外科学会主催の研究会に出席するとともにDr. Johan Beck-Mannagettaの診療室を見学して、病理組織症例について討議しました。その後、ドイツ・チュービンゲン大学のAkademische LehrkrankenhausのProf. Dr. Arne Burkhardtのラボを見学して種々な症例について観察して討議しました。次に視察したのはチューリッヒ大学のProf. Dr. Steffen Gayのラボであります。Steffenは私がアラバマ大学に留学していたときのsupervisorであり、1994年にはチューリッヒ大学へ既に栄転していました。そこでは、分子生物学についてはDr. M. Neidhat, PhDと、分子病理学についてはDr. J. Roth, MDと、生化学についてはDr. A. Baichi, PhDと情報交換をすることができました。次に向かったのはイギリス・マンチェスター大学歯学部で、学部長のProf. WC Shahを表敬訪問し、副学部長・学生部担当のDr. Duxburyにキャンパスツアーをして頂き、歯科保存学の学生実習を視察することができました。1994年にはすでにマネキンを使った実習を行ってありました。ま

た、第4学年に対するLiz Theaker講師の口腔病理学セミナーに参加して学生の授業を拝見し、さらにHoward Carter講師が設定してくれた口腔病理学の症例提示を受け、ラボを拝見しました。次はアメリカエモリー大学において医学部病理学講座口腔頭頸部病理学分野のAssociate Prof. Valerie A. Murrahの症例提示を受けました。その後、テキサス大学サンアントニオ校を訪問し、院内見学を患者対応副学部長のDr. Bill Dodgeと臨床科長のDr. Bill Righby、口腔頭頸部病理学のカリキュラムと外科病理カンファレンスについては病理学のProf. Tom Aufdemorte, advanced educationについては副学部長のDr. Spencer、学部カリキュラムについては教学担当副学部長のDr. Birgit Glass、共同研究については保存修復学のDr. Daniel Chanと臨床研究ディレクターのDr. Steve Dukeからそれぞれ説明を受けました。最後に訪問したのはメキシコ・モンレーのNuevo Leon自治大学歯学部であり、アラバマ大学にいた旧友のProf. Elias Romeroと再会し、学生講義をさせて頂きました。以上の各大学を訪問したのは2～3日の短い日程でしたが、いずれの大学においてもプログラムを組んで丁寧に対応して頂きました。その後の学生教育、研究そして臨床病理に活かすことができました。

学内では、委員会活動として国際交流委員会、中央歯学研究所委員会、大学院委員会、FD委員会、カリキュラム委員会、教務部委員会で委員長としての仕事をさせて頂き、各委員の先生方のご協力を得て責務を果たすことができました。また、自己点検評価の受審制度が法制化され、それに呼応して自己点検評価委員会では報告書作成の編集委員長としての業務に関わらせて頂きました。さらに、理事長・学長の川添堯彬先生のご配慮により法人の役員としての仕事もさせて頂き、大学の運営に関わることができましたことは望外の喜びであります。

2017(平成29)年4月には新学部の医療保健学部が開設され、今後、ますます大学が飛躍、発展することが期待されます。微力ながら大学のさらなる発展に貢献できれば幸いです。

今日まで、お世話になった諸先輩、同輩、後輩の先生方に感謝を申し上げます。これを持ちまして運鈍根の43年を振り返って、定年退職を迎えてのご挨拶とさせて頂きます。長い間お世話になり誠にありがとうございました。

退職するにあたって
英語教室 主任教授 佐ノ木 幸夫



大阪歯科大学の教員の方、職員の方、本当に長い間お世話になり、ありがとうございました。

昭和51年4月に、私はこの大学の助手になりました。当時の教養系の学科(進学科)で教えていたのはそうそうたる顔ぶれでした。思い浮かぶままに名前を挙げていきますと、(敬称略)新田、宮森、小林、長家、肥後、大野、山本、野田、竹内(新)、柘植、外海、二川、新池、倉橋、竹内(浩)と15人おり、なんとそのうち9の方が教授でした。そこに、私とこれまたまだ初々しかった豊田氏が加わったのです。進学科の黄金時代だったのかもしれませんが。会議の時は縮こまって席を列ねておりました。大学の方もにぎやかでした。

学生は一学年に160人以上もいて、4クラス制となっていました。朝8時を過ぎると教職員や学生たちがぞろぞろと列を作って、牧野の坂を上っていったものでした。また今日のように受験生を集

めることに苦勞することはなく、あまりに受験生が多すぎて、試験場が足りなくなり、急遽体育館に椅子や机を運び込んで、試験場にするほどでした。

それから40年以上経ち、いろいろありましたが、未熟な私がこれほど長く務まったのは、ひとえにこの大学の鷹揚な校風と周りの人たちの寛容さのおかげだと思っています。特に、新田明先生、山本卓也先生にはお世話になりました。ひどい授業をしていたと思いますが、不満の色を少しも見せず、黙って見守ってくださいました。本当に感謝しております。教職員のチームで学生と野球をしたこと、教職員の懇親旅行のことなど、まだまだ書きたいことはたくさんありますが、それは後に少しずつ一人で思い出すことによって、これからの生きる糧にしたいと思っています。今までありがとうございました。

定年退職のご挨拶
高齢者歯科学講座 主任教授 小正 裕



私は2017年3月31日をもって大阪歯科大学高齢者歯科学講座を無事に定年退職を迎えることが出来ました。

大阪歯科大学・歯科補綴学第一講座入局から40年間、人生の殆どを本学にて過ごしました。私は常々高齢者歯科学の講演で述べてきましたが、織田信長が好んでいたとされる敦盛の中で「人生はたかだか50年、だから思い切ってやろう！」と語っています。同じ年月を過ごした信長はその最期を悔いていたと伝えられていますが、私は違いました。総義歯と併に大阪歯科大学で過ごしてきた充

実の40年、大阪歯科大学に入学して以来48年という月日を大阪歯科大学でお世話になりました。

また、今は亡き佐川寛典 元理事長・学長のご高配を得て高齢者歯科学講座教授を拝命して早14年がたち、とくに教授を拝命してからは川添堯彬理事長・学長を始め、諸先生方、同級生、講座教員、同門会の先生方、事務方の方々、歯科材料メーカーの方々のご支援、そして何よりも私を支えてくれた家族のご協力の賜でここまで続けることが出来、心から深く感謝申し上げます。

42年間の教員生活の中で沢山の節目がありました。実家は歯科医でもなく6年生の学生時代に何か専門知識を持ちたいとの思い出で当時歯科補綴学第一講座助教授であった西浦 洵先生に4年間総義歯学を学びたいとご相談し、その後良き先輩、後輩に恵まれ定年を迎えるとは思っていませんでした。

教育面では平成12年に本学で一番歴史ある歯科補綴学第一講座から全国の私立歯科大学に先駆けて高齢者歯科学講座へ名称を変え、これからの高齢者社会に対応すべき高齢患者への歯科医療に大きな方向転換を図りました。当初は講座員も高齢者歯科学の知識が乏しく、毎日が新しい情報の吸収に努めていました。その成果から平成27年度から総義歯学は欠損歯列補綴咬合学講座に移行させることが出来、高齢者歯科学に特化した講義、実習および臨床に大きく変貌を遂げることになりました。なかでも、実習と実習帳の作成は講座員が担当し2年前から準備をはじめ、高齢者歯科学・口腔リハビリテーション学実習書として全国に先駆けて完成でき、現在ではその成果を歯科医学教育学会をはじめ、口腔リハビリテーション学会、日本補綴歯科学会および日本老年歯科医学会等で公表しており注目を得ています。

最近では厚生労働省では高齢者歯科医療とくに在宅診療、周術期の口腔ケア等に力を注いでおり、「在宅療養支援歯科診療所の施設基準」の要件として「高齢

者の心身の特性、口腔機能の管理、緊急時対応等に係る適切な研修を修了した常勤の歯科医師が1名以上配置されていること。」が含まれ、近畿、中国、四国および北陸では高齢者歯科を標榜する講座は本講座しかなく沢山の講演依頼が届き、私と高橋一也准教授、柿本和俊講師、および渋谷友美講師で分担して対応してきました。最近では口腔リハビリテーションの実習を含めた講演会を開催し、大学院生も全員参加して、ほとんど土日でも無いほど忙しい毎日でした。

臨床面では西浦 洵先生から直接総義歯学を学び、補綴学では現在福岡歯科大学名誉教授の羽生哲也先生に指導医としてご教授いただきました。今思い返しますとG棟が竣工した当時、G棟3階に配属され私一人で60名の学生の総義歯臨床実習を担当し、現在の高橋一也准教授と出会い、現在まで同じ釜の飯を食った間柄でございます。

研究面では講座に席を置いた2年目に故筆本秀和先生から研究を手伝ってみないかと声を掛けて頂き、先生の研究テーマであった鑄造用埋没材から私は金銀パラジウム合金に変わる金属として研究を続け、学位を取得させて頂きました。生体親和性、比重が低い、価格の面からもチタンの歯科応用についてその後もライフワークとして研究を続け、現在でもその考えは変わっていません。

教授人生で私が最も影響を受け、自身の財産になっているのが教授就任3年後の教授海外視察の経験でした。ドイツ、イギリス、ベルギー、ウルグアイと3週間に渡り海外訪問をさせて頂きました。中でも南米のウルグアイではProf. Susumu Nisizakiに大変お世話になり教えられたことが大きいものになっています。ウルグアイは非常に貧しい国で何とかして職に就きたいと歯学生からひしひしと感じ取ることが出来ました。先生は学術発表はポスター発表では得るものが少なく、オーラルで発表することを心がけなさいと教授され、その為には教授自ら発表することを心がけることの教を

受けました。後に続く若い教員は是非オーラルで発表して頂きたいものです。また、臨床面では総義歯臨床ピエゾグラフィの教授を受け、現在でもその教えを守っております。

学外活動では歯科医師国家試験委員、歯科医師資質向上委員会と6年間厚労省に出向き良い経験をさせていただきました。また、2009年から日本歯科医師会、日本歯科医学会、日本歯科商工協会の臨学産が一体となって今までに無い革新的な取り組みとして、在宅訪問診療の専用ポータブル歯科診療器材パッケージの開発、具現化を目指した「在宅診療用ポータブル歯科用器機の開発」に当初から参加することが出来、このことも私にとりまして大きな財産になっております。参加されている歯科材料メーカーの方々には、これで終わらずにブラッシュアップを続けて頂いて、特に発電機も備えた器機にして頂き、世界中何処でも歯科治療が行えるオールジャパンの訪問器機として世界に羽ばたくことを願っております。

最後になりますが、私がお話するときの纏めは高齢者の生活全般におけるQOLをより良く維持することが我々医療人の最終目標で、高齢者の生活が良好ということは、ひいてはそれを支える若い人々のQOLが良好です。

これまで、好きな総義歯、高齢者歯科医療で活動出来たのは多くの方々の公私に亘るご厚情とご協力、ご支援の賜で心からお礼申し上げます。

入局10年～20年で総義歯を学び、30年にして独立した教授という立場となり、孔子の言うとおりの、40年で節目と思い、今後は思うままに振るまい、生きていきたいと思っています。4月から医療保健学部の学部長として心も新たに頑張りたいと思っています。

皆様方には今後ともご指導、ご鞭撻を頂きますことをお願い申し上げます。私のお礼の言葉とさせていただきます。

感謝の気持ちを込めて

—案あれば苦ありの春夏秋冬 30年
歯科東洋医学室 専任教授 方 一如



2017年新春を迎えて、雪の結晶も解けて、桜が咲いて、私は大阪歯科大学を定年退職します。

私が1986年11月21日に日本に来てから、瞬く間に約30年が経ち、すでにこの美しい国は私の心の中で、見知らぬ国から第二の故郷へと変化しています。大阪歯科大学は私の第二の母校であり、留学生時代から、講師、准教授、大阪歯科大学創立以来の初代女性教授になった現在に至るまで、大阪歯科大学の元理事長・学長故佐川寛典先生および故今井久夫先生にお世話になり、心から感謝しています。

さらに、現川添亮彬理事長・学長先生には私を専任教授に任命していただきました。そして、万年青年で体力、知力、指導力にも満ちあふれておられる現理事長・学長先生にはいつも有益な高説とご助言を、今尚記憶がよみがえる指導を賜り深く感謝しております。30年間にわたり本学教職員の皆様には温かいお心遣いのご指導を賜り深く感謝しております。改めて厚くお礼申し上げます。日本の良き師、良き友は私の成長をととも助けてくださいました。私はこのご恩を胸に生涯忘れることはありません。

30年間の春夏秋冬は、30年間の案あれば苦ありの人生でもありました。留学と就職の1コマ1コマがつぎつぎと目に浮かんでいきます。思い起こせば、30年前、上海交通大学口腔医学院邱蔚六現名誉院長が大阪歯科大学戸田忠夫名誉教授

に外国人研究者として私を紹介して下さいました。1993年12月22日には、大阪歯科大学解剖学講座故太田義邦名誉教授のご指導により博士(歯学)の学位を受領いたしました。私が中国人の歯学博士第一号になりました。その間、諏訪名誉教授には私に研究の進め方、論文の書き方など色々ご指導いただき、心から感謝しております。諏訪教授は研究のほかに人格の大切さについても教えてくださいました。「人間には、信念がある。平和な心がある。欲望はないほうがいい。努力と誠実がある」と言われました。諏訪名誉教授は正直誠実な日本の学者です。私の家族に対しても、先生から様々な面で助けていただきお世話になりました。人間の一生にはいろいろな人との出会いがありますが、学問だけでなく公私両面にわたってご指導を賜った人生訓をかみしめました。

2011年に大阪歯科大学は創立100周年を迎えましたが、人生67年の内の30年間を、また大阪歯科大学においては創立100年の内の3分の1をこの大学で研究、教育、国際交流の各領域において活躍することができました。歴代の理事長・学長をはじめ、名誉教授・教授の先生方、教職員の皆様、そして守衛室や清掃の方まで、幅広く温かい友情をいただき、心から感謝しております。皆様には、困難と辛苦の際はいつも勇気を与えていただき、生活様式、言葉の壁、人間関係など、あらゆる日常生活の中で私を助けてくださいました。この第二の母校の温かさはまるで太陽の光を浴びるように幸せなものであり、今の私があるのはすべて大阪歯科大学のおかげと思っています。

それゆえ、私は東洋医学という宝橋を通じて、文化と人間の交流に貢献したいと考えています。人の役に立つことは何よりの喜びであると思っています。東洋医学における私の“気血水”をささげたく、学生の教育に全力を尽くしてまいりました。人生とは仕事、人生とは行動、人生とは奉仕、人生とは“workout”で、

心地よい緊張感を味わい、心と体に刺激を受け、その積み重ねこそが私の生きる原動力です。今までの恵まれた自分の境遇を思い返すたびに、感謝の気持ちでいっぱいになります。

私は一日一万歩を歩くことを心がけています。また、一生一人と友達になりたいとも考えています。今まで出会った3万人を超える人々との出会いが私を育ててくれたと思います。人は人と出会って感動し、自分の世界を広げていきます。人の素晴らしさ、優しさ、美しさ、強さに感動することができました。

国際交流も私のエネルギーの素です、30年間にわたり交流に全力を注ぎました。大阪歯科大学と中国六大学（上海交通大学口腔医学院、南方医科大学、四川大学华西口腔医学院、西安第四军医大学口腔医学院、北京大学口腔医学院、山西医科大学）日中両国民間交流には努力と貢献をさせていただきました。輝かしい成果を取めることができました。中国六大学の客員教授と国際交流顧問として、精一杯日中民間友好交流に尽力しました。中国各大学からとても尊敬と信頼を受けることができました。私の名前「一如」は、東洋医学の基本である「心身一如」と同じ字ですから、日本と中国の友好関係を繋ぐ架け橋となることが私の使命だと思っています。日中両国は一衣帯水で、この2000年余り、平和と友好が両国民の心の主旋律でありました。中国五大学の歴代学長と歴代口腔医学院院長および教職員に心から感謝しております。いつでも、どこでも、中国に対し、日本に対し、常に友好的な気持ちを持ち続けることが私の人生の生き方でした。さらに、2001年には3ヶ月間アメリカコロンビア大学歯学部で共同研究を行うとともに、両校の交流のスタートにも努力しました。16年間にわたる両大学教員と学生の交流協力者です。

私は人生で大阪歯科大学という大家族に加われた幸運をいっそうかみしめています。それは私の人生経験を豊かにし、私の人生の基礎を固めさせてくれまし

た。私は努力と冒険を続け、イノベーションを起こすことをやめません。私の退職後も、これからも第二の故郷、第二の母校に愛を積む、新しい足音を聞いてくださいませんか。

最後に、海外生活30年の長い間に、精神的、経済的ないろいろな面で私に支援していただき、永遠の眠りについた父方志明（享年94）、母張琬如（享年91）に深く感謝感恩しております。両親に恥ずかしくないような道をしっかりと歩むことが、私どもにできるせめてもの恩返しだと思います。あなたたちの娘でいたことを心から誇りに思います。どうか、これからも、私どもを見守り、お導きください。

定年退職のご挨拶
総合診療・診断科 専任教授 小出 武



平成29年3月31日をもって、大阪歯科大学を定年退職となりました。昭和49年に大阪歯科大学を卒業後、同年、大阪歯科大学大学院に進学し、稗田豊治先生が主管された小児歯科学を専攻しました。昭和53年に同講座の助手として採用され、以来、平成11年に総合診療部診療科が開設されるまでの25年間、小児歯科を専門とし、教育、研究、診療に携わってまいりました。小児歯科学講座は昭和43年に稗田豊治先生を主任教授にお迎えし、開設された比較的新しい講座でした。従来の成人の齲蝕治療と異なる小児のための治療を実践するということに魅力を感じていました。咬合誘導で不正咬合を未然に防ぐということにも興味を持っていました。このような理由

により小児歯科の医局に入局させていただきました。

大学院時代はテトラサイクリン系抗生物質による着色歯の研究を行い、同剤の血中濃度と着色との関連を検討し、学位論文としました。血中濃度の測定に生物学的微量定量法を用いたことから細菌学教室のお世話になりました。主任教授の佐川寛典先生は剣道部の先輩でもあり、厳しいながらも温かいご指導を賜りました。直接ご指導していただいた尾上孝利先生には1年半という短い期間ではありましたが、研究に関してほんとうに多くのことを教えていただきました。研究者としての基礎を叩き込まれたように思っています。先生にはその後も臨床研究や海外での学会発表などでお世話になりました。

大学院修了後は、フッ素徐放性歯科材料を主に研究対象とし、エナメル質と象牙質へ及ぼす影響を検討し、同材料の小児歯科臨床への応用を目指しました。その間、大学院生や専攻生とともに研究を進め、いくつかの新知見を見出し、それらを原著論文としてまとめてきました。現在、MI (Minimam Intervention) が注目されています。充填材料の象牙質への接着性の向上がMIを可能にしたといわれていますが、フッ素徐放性歯科材料の存在もMIとは切り離せないと考えています。その意味では私たちが行ってきた研究も現在の診療に生かされていると思います。

平成11年4月に大阪歯科大学臨床歯科学研究所附属診療所 (OMMビル診療所) を引き継ぐ形で附属病院南館2階に新設された総合診療部診療科に小児歯科学講座から移籍しました。井上宏部長のもと科長として同科を率いることになりました。患者の医療ニーズに応えることを重視した臨床歯科学研究所の姿勢を受け継ぎ、附属病院内でも患者の満足を第一義とした総合歯科治療に取り組んできました。また、平成18年の歯科医師臨床研修義務化以降、同事業に積極的に関わり、院内の複合型臨床研修の担当科

として臨床研修歯科医の育成に尽力してきました。

平成20年4月、本学の機構改革により総合診療部診療科と口腔診断科が統合され、総合診療・診断科が新設されました。両科の統合に伴い、医員の業務は、総合診療だけでなく診断業務も加わり、時間的にはきつくなりましたが、二つの業務に懸命に取り組み、大過なく過ごすことができました。

日本総合歯科学会の規約には、その活動の目的が以下のように記載されています。「包括的歯科医療である患者中心の総合歯科診療並びにそれにかかわる臨床・基礎研究、及びこれらの卒前教育・卒後研修並びに生涯(継続的)研修についての研究などの発表を通じて、包括的歯科医療を担う歯科医師の養成に寄与することを目的とする」とあります。当科が開設以来、歩み続けてきた方向はおおむねこの目的と一致しています。私たちが実践している総合診療を通して、学部学生および卒後研修歯科医を教育し、患者に信頼される歯科医師を育てたいと考えました。学部学生の教育は、診断部門での臨床実習が中心で、実際の患者の間診および診査を課し、初期診断などができるように指導しました。人間関係が複雑で、患者の要求が多様化している現在、歯科医療においても、従来型の間診だけでは満足できる結果は得られません。医療コミュニケーション技術を使い、患者の背景を見つめ、その訴えに共感し、患者および医療者がともに満足できる患者中心の歯科医療を実践できる歯科医師を育てたいと考えました。

また、臨床研修事業に関しては、基本的な診療能力を持ち、患者の心を斟酌できる実践に強い歯科医師の育成を目標とし、この目標を達成するためにできる限り多くの症例を経験させ、さらに、担当患者の要望を十分に取入れた総合診療計画の立案を課題として与え、その症例発表を義務付けました。

一方、平成24年より本学の既卒者教務部委員会の委員として、歯科医師国家

試験不合格者の支援プログラムに参画しました。既卒者との連絡を密にとり、学習指導を行うとともにメンタル面のサポートを重視した支援を心がけ、既卒者の中から一人でも多くの合格者を出すように努めました。

関西医科大学の有田清三郎名誉教授との共同研究として始まった音声入力による診療録記載を主要なテーマとして一連の研究を行ってきました。口腔診査内容の音声入力のほかに音声入力法を用いて難聴者を対象とした医療面接時の文字表示システムを構築しました。また、この音声入力法を用いて患者の発音を評価し、補綴物、歯列不正、口腔機能障害などが音声に及ぼす影響を検討しました。最近ではオーラルフレイルの一つとして注目されている滑舌の低下の評価に本法を応用しています。歯科医学の研究領域において音声特に日常会話に関する研究は少なく、生活の質の向上が重要視されている現状から推察すると、将来、発展が見込まれる分野だと考えています。

診療に関しては、当科のみですべての歯科治療を行うという特性から、効率的に治療を進めることで患者の時間的ニーズに応えたいと考えました。また、基本を忠実に行うことで、安全、確実に、永続性のある歯科治療を提供したいとも考えました。開業歯科医院からは治療困難症例が、また、医科系の病院からは全身疾患を有する患者が数多く紹介されており、これらの患者にも紹介元と連携をとりながら治療にあたってきました。

近年、医療の高度化や高齢社会の到来によって、急速に歯科衛生業務の需要が増えています。歯科保健・予防管理を軸とする保健医療サービスの重要性が人々に浸透しています。当科でも歯科衛生士による歯周疾患のメンテナンスを平成11年の開設当初から行ってきましたが、同メンテナンスを希望する患者は確実に増加しています。また、最近では近隣の総合病院の依頼を受けて周術期のがん患者の術前、術後の口腔管理を歯科衛生士とともに担当しています。

平成26年に専任教授ならびに大阪歯科大学歯科衛生士専門学校校長を拝命しました。歯科衛生士教育を経験することで、教育を別の視点から見ることができました。歯科医師の教育とは異なる厳しさが感じられ、その厳しさは歯科衛生士を育てるうえで大切であると思いました。

大事にしている言葉があります。『和顔愛語』です。わげんあいご、またはわがんあいごと読みます。仏教でよく用いられ、釈迦の言葉ともいわれています。相手のことを思って、和やかな顔で、やさしい言葉でを意味します。私は診療室で患者さんと話す時や学生や研修歯科医を指導する時に心がけています。そして、もう一つ大事にしていることがあります。それは相手の目を見て話すことです。本学の歯科衛生士専門学校ではこれを厳しく生徒に指導していました。目を見つめて話せば、自分の気持ちが自然に伝わり、相手の心もわかります。患者の背景を知る手掛かりになり、その訴えに共感することができます。

総合診療部診療科の科長、教授就任後18年の間、総合診療歯科医として教育、研究、診療に取り組んできましたが、それを許し、また、支えてくださいました、大阪歯科大学理事長・学長川添堯彬先生はじめ、大学ならびに附属病院の教職員の皆様に感謝いたします。また、私の考え方に同意し、そして補佐してくれた医局の方々から心からお礼を申し上げます。

|| 平成 28 年度 私立大学等改革総合支援事業採択

このたび、本学は平成 28 年度「私立大学等改革総合支援事業」(文部科学省)の支援対象校に選定されました。

この事業は、教育の質的転換、地域発展、産業界・他大学等との連携、グローバル化などの改革に全学的・組織的に取り組む私立大学等に対する支援を強化することを目的に実施されるもので、平成 25 年度に創設されています。本学は昨年度から本事業のタイプ 1「教育の質的転換」を継続して申請し、このほど 2 年連続で採択を頂きました。(タイプ 1 は申請校数 678 校、選定校数 362 校、選定率 53%)

本学が選定されたタイプ 1 は、全学的な体制での教育の質的転換(学生の主体的な学修の充実等)や、高大接続改革に積極的に取り組む大学等を支援することになっています。アドミッションセンターの設置による組織改善、一定の語学力を有する受験生の外国語(英語)試験の受験免除、入試会場や入試検定料支払い方法の追加、大阪聖母女学院高等学校との教育の連携協力協定締結など、本学は 28 年度も様々に入試改革を実行してきました。今回の採択を新たな力として、本学は今後とも教育の質の改善・改革に全学をあげて取り組んでまいります。

|| 行事報告

▶ 大学

8/31(水) 2016 年度 人権講演会(人権標語表彰式)

17:00 場所：創立 100 周年記念館大講義室、楠葉学舎大学院講義室

10/31(月)

16:00

本学人権啓発推進委員会主催による人権講演会は、2014・2015 年度と人権教育室の李嘉永講師に職場のハラスメント問題をテーマに取り上げていただき開催しましたが、今年はハラスメント問題をさらに深く掘り下げ「どんな行為がハラスメントに当たるか」と題して李先生にご講演いただきました。



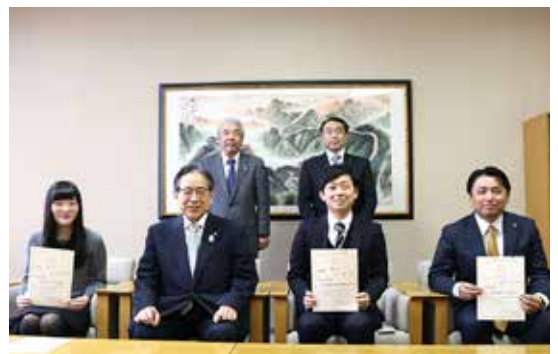
この中で、セクシャルハラスメントと比べてパワーハラスメントの場合は、加害者側のハラスメント性の認識が低く、また当該行為が「業務として適正な範囲内の行為であるか否か」というハラスメント性の判断基準が非常に難しいようでした。このことは参加者アンケートからも窺え、「業務上の指導のつもりで行っていた言動が、パワーハラスメントだったかもしれません」等のご意見が多く寄せられました。

1 回目は鉄道事故の影響もあり楠葉学舎教職員の参加に支障が生じたことから、第 2 回人権講演会を 10 月 31 日に楠葉学舎で開催することとなり、最新の裁判例を付け加えた内容にて講演が行われました。参

加者からは、「前回の講演で不十分な理解であった部分が、今回の具体的な説明により大変良く理解できました」等のご意見が寄せられました。

また、12 月 14 日(水)には楠葉学舎において 2016 年度人権標語表彰式を行いました。今年度は本学学生・教職員の皆さんから合わせて 22 件の応募があり、人権啓発推進委員会委員による選考の結果、最優秀賞は田中貴久さんの「持ってみよう 違いを認める大きなうつつわ」に決定いたしました。入選作品は次のとおりです。

- ◆最優秀賞「持ってみよう 違いを認める大きなうつつわ」(IR 室・田中貴久さん)
- ◆優秀賞「気づきあい 助けあって 咲く笑顔」(第 1 学年・三井紗楽さん)
- ◆佳作「お互いが 思いやれば 差別なし」(歯科医学教育開発室・益野一哉准教授)



【天満橋学舎】

第 24 回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座、枚方講座)

9/ 3 (土)

場所：創立 100 周年記念館大講義室、楠葉学舎講堂

9/10 (土)

24 回目となる大阪歯科大学公開講座の今年度のメインテーマは『めざそう健康長寿:QOL 向上に直結する口腔ケア』

【楠葉学舎】

2017

2/18 (土)

2/25 (土)

初日の 9 月 3 日、2 月 18 日は、わかさ童間リハビリテーション病院 歯科・リハビリテーション科の糸田昌隆 診療部長が「元気になる口腔ケアのすすめ～健口から健康生活へ～」というテーマで講演されました。



糸田先生はご自身の医療現場での経験を踏まえ、専門的なお話から、虚弱化（フレイル）予防のための機能的口腔ケアのポイントや、実際に起こりうる事故や予防方法、健康にまつわる身近な話題まで、スライドショーを用いてユーモア

を交えつつ解説してくださいました。誤嚥に至る様子を捉えた動画が再生されたとき、会場から一斉にどよめきが上がり、受講者の皆さんの表情が硬く引き締まったのが印象的でした。

9 月 10 日は、本学副学長で高齢者歯科学講座の小正裕先生が「口腔ケアが肺炎予防に !!」と題して講演されました。長寿社会である日本にとって肺炎は深刻な疾患であり、誤嚥性肺炎と摂食嚥下障害、その予防法について解説し、超高齢社会において QOL の維持・向上を目指す医療、患者さんの生活全体を視野に入れた「治し、支える」医療の提供が如何に重要かをお話しされました。



2 月 25 日は、当初講演予定の小正教授がやむを得ない理由により、急遽講演が叶わなくなり、同講座の高橋一也准教授がピンチヒッターで講演されるハプニングがありました。突然の代役にもかかわらず、高橋先生は「口腔ケアが肺炎予防に !!」という演題で 100 分ほどの講演を見事果たされ、口腔ケアに関する幅広い内容とテンポのよいお話は聴講者の皆さんに大変好評でした。



いずれの日も講演終了後は、受講者の方から「もっと長く聴きたい」「日常生活に大変参考になった」など、主催者にとって大変喜ばしいご感想を多くいただきました。

9 /19 (月)

14:00

2016 年度 第 6 学年父兄会・個人懇談会

場所：創立 100 周年記念館大講義室

父兄会副幹事長により開式の辞が述べられ、総会が開始となりました。

川添堯彬 理事長・学長をはじめ、各第 6 学年関係先生方から本学の取り組み、第 6 学年指導体制についてのご説明があり、保護者からの質疑応答を経て、総会は終了となりました。総会終了後は、特別アドバイザー（学生担当教員）と保護者、学生による 3 者面談（個人懇談会）を行いました。どの保護者も、ご子息・ご息女の進捗状況について熱心に質問をしていました。



9/29(木) 2016年度FDセミナー(第6～10回)

17:00 場所: 創立100周年記念館大講義室(楠葉学舎に同時中継)

●第6回 9月期

開催日時: 9月29日(木) 17:00～18:30

演題: 「歯科からの食育」～未来の大人たち、未来の子どもたち、そのまた未来の子どもたちのために～

講師: 三室歯科医院・藪田宗孝氏

出席者数: 教職員 182名

内容: 食べているものが、いかに生活に影響を与えているのかを実例を交えて説明いただいた。結果、食を変えることで、人生にもより良い影響を与えることができるということをご自身の活動を基にご講演いただいた。

●第7回 10月期

開催日時: 10月13日(木) 17:10～18:40

演題: 「発達障がい・学習障がいを持つ学生の見極め(発見)とその指導(対応)」

講師: 外部講師

出席者数: 教職員 174名

内容: 「発達障がい」とは学習障害(LD)・注意欠陥多動障がい(ADHD)・自閉症スペクトラム障がい(ASD)の総称とのこと。一概に発達障がいといって



もそれぞれ特徴が有り、見分け方及び応対方法について詳細にご説明された。

●第8回 11月期

開催日時: 11月10日(木) 17:10～18:40

演題: 「学生指導における共感的な関わりのコツ」

講師: 京都大学学生総合支援センター長

杉原保史 教授

出席者数: 教職員 168名

内容: 「否定的な感情の表現が苦手」という悩みが、大学相談室を訪れる学生の相談事項として全国的に増加傾向にあるとのこと。一方で日本の若者層は世界的に見ても自殺率が高く、内閣府のデータによると「自分自身に満足している」学生の割合は5割に



満たないという。そのような学生と関わっていくため、「共感」というテーマを根底にコミュニケーションの手段、選択肢などを実例を交えてご説明いただいた。

●第9回 11月期

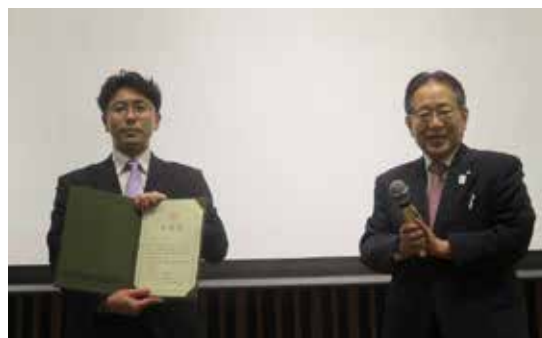
開催日時: 11月28日(月) 17:00～18:30

演題: 「『アクティブ・ラーニングで教える』という誤解を考える」

講師: 京都大学総合博物館・塩瀬隆之氏

出席者数: 教職員 140名

内容: 「アクティブ・ラーニング」とは何か、何故今求められているのかという説明の後、実際に参加者を4～5名のグループに分け、ワークショップを行った。その後、効果的なアクティブ・ラーニングの方法について、ワークショップで行った内容に基



づきご説明いただいた。

●第10回 2月期

開催日時：2月13日（月）17:00～18:30

演題：「歯科教育におけるeラーニング教材の作成」

講師：東京医科歯科大学統合教育機構事業推進部門

大学院医歯学総合研究科 教育メディア開発学分野・木下淳博 教授

出席者数：教職員 132名

内容：講義に使用するパワーポイント等について、どのように活用すれば、学生を惹き付ける教材となるのかを説明の上、様々なソフトの機能を活用し講義で使用可能な動画教材の作成方法について、実際の作成手順を交え、ご説明いただいた。

10/16（日） 2016年度 地方父兄会（和歌山県）

10:00 場所：ホテルシティ inn WAKAYAMA

2016年度の地方父兄会は、10月16日にJR和歌山駅近くのホテル シティ inn WAKAYAMAにて行われ、ご父兄9組が参加されました。本学からは、川添理事長・学長、田中教務部長、田中学生部長をはじめ、関係各位が出席し、教務関係報告、学内報告などを行い、引き続き個別面談を実施しました。



【体育祭】 2016年度 大学祭

10/22（土） 場所：牧野学舎、楠葉学舎

●体育祭

【楠葉祭】 10月22日、牧野学舎グラウンドにて体育祭が盛大に実施された。天候にも恵まれ、大阪歯科大学学生

約300名が中心となり、様々な競技が行われた。また、大阪歯科大学歯科技工士専門学校及び歯科衛生士専門学校

の学生も参加。特にクラブ対抗リレーでは、大学生・専門学校生合同チームも多数出場し、大いに盛り上がり笑顔と歓声が溢れた。リレーの勝

敗も大切なことだが、最下位のチームには優勝チーム以上の声援と拍手の中、ゴールテープを切り、参加者全員が一丸となった素晴らしい体育祭であった。

●楠葉祭

10月29日・30日、楠葉学舎内で楠葉祭が盛大に実施された。2日間とも晴天に恵まれ、地元の方々（家族連れ、保育園・幼稚園児、小学生や中学生等）も多数来場された。また、同時に開催された枚方市が主催する「子ども大学探検隊」では、枚方市内在住・在学の小学生（4年生～6年生）約40名が、「歯に関する講義・模型づくり・学園祭体験」に参加。様々なプログラムに目を輝かしている姿が印象に残った。また模擬店も完売になるところが続出し、にぎやかな雰囲気の中で2日間があっという間に過ぎ無事に終わった。



な雰囲気の中で2日間があっという間に過ぎ無事に終わった。

10/27 (木) 中学生職場体験学習

10/28 (金) 場所：楠葉学舎図書館

10月27日、28日の2日間、楠葉中学校2年生3人が図書館本館で職場体験学習を行いました。館長挨拶、楠葉学舎の見学を経て、館内を見学しました。書架に並んだ図書や雑誌、視聴覚資料を手に取りながら、歯学に特化した大学図書館の蔵書の特色について、熱心に耳を傾けていました。

また、PCコーナーでは文献検索データベースや3D解剖学コンテンツに触れ、大学図書館ならではの学習・研究ツールに感心していました。

見学の後はいよいよ実務の体験です。カウンター業務のほか、新しく購入した図書・雑誌の目録データの作成や登録作業、装備を体験しました。また、大学院生からの文献調査依頼を受けて掲載雑誌を探し文献を提供するなど、苦戦しつつもひとつひとつ丁寧にこなしていました。

今回の職場体験を通して、図書館には色々な仕事があることを知り、最初のイメージ「図書館の仕事＝図書の貸出・返却」が大きく変わったようです。

大学院生や教員といった利用者への対応、文献検索・所蔵調査、資料の整備など2日間で様々な図書



館業務を体験した感想を聞いたところ、「どの作業もつながっているので重要だと思った」「(利用者から)お礼を言ってもらえると嬉しく、やりがいを感じた」「論文をパソコンで探してその論文が書いてある図書・雑誌を探すことが楽しかった」など、図書館の仕事に手ごたえを感じてくれたようです。

図書館内でも、職場体験の様子を掲示しています。是非見に来てください。

10/29 (土) 平成 28 年度 子ども大学探検隊

14:00 場所：楠葉学舎

平成28年度の子ども大学探検隊は楠葉祭初日の10月29日14時から2号館第5大講義室及び第8実習室を利用し開催されました。参加者は枚方市在住の小学生31名の他、御両親、兄弟、姉妹を含め約60名でした。

今年度も子ども達が喜ぶような企画として、昨年の移動動物園に続き、Street Performerによる風船パフォーマンスの実演を文化祭で企画していただいているお陰もあり、子ども探検隊会場でもパフォーマンスを披露していただいたことや4年生・芳鐘君が扮する口腔戦士デンタマンの登場もあり、本学の子ども探検隊は、より充実した内容となってまいりま



した。

今年は、4年生・篠崎百合絵さんの司会・進行により、枚方市地域振興生涯学習課課長による開催の挨拶の後、川添理事長・学長の挨拶と続き、歯科に関するクイズ形式の学生による講義と指の模型作製の2班入れ替えによるイベントが実施されました。

学生による講義では2年生・河野真帆さんが講師となり、各種動物の骨格標本を見せて、触れさせるクイズを出題した後、回答、解説する形式で進行し、



子ども達も実物の標本に触れたことにより、飽きることなく、多に盛り上がった講義となりました。

指の模型製作は毎年実施している、本学の子ども探検隊でのメインイベントとなる企画で学生の指導の下、子ども達も真剣に製作に取り組んでいました。

また、最終のイベントとなる Street Performer による風船パフォーマンスは、ゴム風船が様々なキャラクター

協力いただいた学生

4年生：篠崎 百合絵、井内 拓磨、上田 真義、大崎 航平、島岡 毅、横山 純人、太田 久美子、杉本 彩乃、竹中 花那子、箕西 夏里奈、領木 志帆

2年生：河野 真帆、新谷 真奈、谷口 有美、中本 優子、廣原 真紀

1年生：赤井 亨輔、稲本 実華子、田中 芳歩、谷口 侑里映、藤井 志帆

クターや動物に変化することにより子ども達は瞳を輝かせ、最後には抽選でプレゼントされ大いに喜ばれていました。

今年も、昨年に引き続き子ども達の笑顔に包まれた、子ども大学探検隊となりました。指導いただきました藤原教授、協力いただいた学生の皆さん本当にお疲れ様でした、そして、ありがとうございました。

11/4 (金) 2016 年度 解剖体遺骨返還式

14:00 場所：楠葉学舎大会議室

25 体のご遺骨が各ご遺族に返還されました。

11/26 (土) ひらかた市民大学 2016

13:00 場所：楠葉学舎大学院講義室

11月26日、高齢者歯科学講座教授で副学長の小正裕先生が、9月に開催した大学の公開講座（天満橋講座）に続き、「ひらかた市民大学」（枚方市内5大学との連携による講座）にて講演しました。

講演テーマを「歯の大切さを学ぼう～お口を健康に、そして元気な老後へ～」とし、小正先生は、誤



嚥性肺炎・摂食嚥下障害など高齢者特有の疾病を予防し、健康で長生きするためには、日常の口腔ケアがとても重要であること、そして、高齢者が健康寿命を延ばし、QOL（生活の質）を向上させることが、ひいてはそれを支える人々や社会のためにもなることをお話しされました。

12/2 (金) 2016 年度 防災・防火訓練

15:10 場所：楠葉学舎

12月2日、楠葉学舎において、教職員・第3学年学生の約200名が参加し、防災・防火総合訓練を実施しました。

午後3時10分、「南海沖にて震度6強の地震が発生した。」との設定で、緊急地震速報を想定した避難訓練を開始。引き続き、地震によって発生した火災（出火場所は食堂）を想定し、各部局等で組織する自衛消防隊を中心に、避難誘導、安否確認、非常物品搬出、傷病者搬送等訓練、防災センターでは消防署への通報、施設点検等訓練を行い、学生有志には水消火



器・消火器・屋内消火栓を用いた初期消火訓練を体験してもらいました。

12/28 (水) 2016 年 教職員忘年慰労会

15:00 場所：附属病院プラザフォーティーン

年末恒例の教職員忘年慰労会が附属病院本館 14 階プラザフォーティーンで開催され、145 名の教職員が参加しました。

川添理事長・学長による開会の言葉の中で、2016 年の総括と来年の抱負が述べられた後、下村常務理事の乾杯のご発声があり、歓談の時間へと移行しました。



その後、参加者の皆さんお待ちかねのお楽しみ抽選会が行われ、歯科放射線学講座・清水谷公成主任教授が理事長賞「旅行券」を、歯科衛生部・藤林由利安主任が学長賞「全国百貨店商品券」をそれぞれ射止められました。

慰労会は田中常務理事の挨拶をもって中締めとなり、2016 年は余韻を残しながら暮れていきました。



▶ 附属病院

10/13 (木) 2016 年度 院内感染対策講習会(第 7 ~ 9 回)

場所：創立 100 周年記念館 大講義室

● 第 7 回

日時：10 月 13 日 (木) 16:00 ~ 17:00

演題：「飛沫感染対策」「今年度のインフルエンザワクチン接種について」

講師：三木俊明氏 (ファイザー株式会社)

福澤美智子 看護師主任 (CT)

出席者数：教職員 127 名

昨年引き続き、感染対策勉強会や接遇研修を年間 100 病院以上で講師活動をされている三木俊明氏をお招きして、飛沫感染対策の講習会を行いました。12 月～2 月にピークを迎えるインフルエンザに対して、手洗いを徹底し感染経路を断つこと、予防接種を受けること、人混みは避けること、良い健康状態を保ち免疫力を高めることが大切である点を強調されました。

福澤 看護師主任からは手洗いの手順や当院の擦式



アルコール製剤の使用量が報告され、今年度のインフルエンザワクチン接種の変更点などについても説明していただきました。教職員のワクチン予防接種率は昨年 61% と過半数は超えたものの、まだまだ低いのが現状です。流行前のワクチン予防接種を積極的に受けていただくよう要請がありました。

● 第 8 回

日時：1 月 12 日 (木) 16:00 ~ 17:00

演題：「針刺し・切創対策について」

講師：歯科保存学講座 谷本 啓彰 講師 (ICT 委員)

出席者数：教職員 82 名、5 年生 115 名

医療従事者が他者の血液などで汚染された針・器具による外傷を負うことを針刺し・切創といいます。歯科用器材は多種多様であり、煩雑になりやすく、鋭利な物も多いことからいつでも起こりえます。



発生した際は、スピードをもって周りの支援を受けながら対応する事が大切です。当事者だけでなく該当する他者にも感染症検査に同意し、受診いただく必要があります。発生後、30分以内の採血が目標とされています。

こういった針刺し・切創の多くは診療器具の片付

け時に発生しています。片付けを原則通り術者が行わず、他者が行った場合に発生しているので、注意するよう案内がありました。同時に、リキャップ時にも注意が必要です。リキャップせずに針廃棄BOXにそのまま処分することや、ワンハンドテクニックにより防止できます。

また、時間外・休日診療の針刺し・切創発生時の対応についても説明がありました。

院内感染防止マニュアルに基づき、常に細心の注意をはらうこと、発生した場合は必ず報告することの大切さを再確認できる良い機会となりました。

●第9回

日時：3月7日（火）16:00～17:00

演題：「口内法 X 線撮影時の感染防止対策実態調査
フィードバック」

講師：細菌学講座 円山由郷 助教（ICT 委員）

出席者数：教職員 58 名

口内法 X 線撮影時、患者の唾液が医療従事者の手指に付着しやすい。また、唾液には感染症の病原体が含まれているにもかかわらず、血液より汚染源の意識が低い傾向がある。

アメリカやイギリスのガイドラインを基に、口内法 X 線撮影時の感染防止対策について説明された。使い捨てグローブを正しく着脱すること、口腔内へ挿入する器具を十分に洗浄すること、撮影時に接触しうる物品（照射スイッチやドアノブ等）にカバーを使用すること、撮影後のフィルムを唾液汚染されたグローブで触れないようにすること等により、唾液の手指への付着が防止できる。



また、当院の歯科医師・研修歯科医・歯科衛生士に対して実施した院内感染対策に関する実態調査のフィードバックが行われた。実態調査の結果、指導医を始めとする全ての医療従事者の院内感染防止への意識をより一層向上する必要性が窺えた。

今回の講習会は、日本環境感染学会総会・学術集会（2017年2月25日開催）で当院院内感染防止委員会の代表として歯科放射線学講座の蒲生祥子先生が発表された内容を、共同発表者である細菌学講座の円山由郷先生にご講演いただいた。

1/19（木）2016年度歯科医師臨床研修 第5回指導歯科医に対する講習会

場所：附属病院臨床講義室

●第1回

日時：1月19日（木）17:15～18:20

講師：有歯齧咬学講座 田中昌博 主任教授

内容：「ファイバーポスト、CAD/CAM冠の適用の要点」

受講者：当院指導歯科医等 79 名、協力型施設指導歯科医 32 名

ファイバーポストを用いた支台築造・ハイブリッドレジンでのCAD/CAM冠が、2014年7月より保険収載されたことを受け、臨床ステップのポイントや注意点の説明がありました。



●第2回

日時:2月16日(木) 17:15～18:20

講師:歯科保存学講座 山本 一世 主任教授

内容:「MIの概念に基づくう蝕処置」

受講者:当院指導歯科医等72名、協力型施設指導歯科医29名

う蝕の形成機序の解明や接着性修復材料の進歩により、FDI(国際歯科連盟)が定めるMI(ミニマルインターベンション)の概念が2016年に更新された。それと同時に保存修復学も変遷を遂げており、日本歯科保存学会が発行している治療のガイドラインを基に、う蝕処置について詳しく説明された。

質疑応答もあり、有意義な講習会となった。今年度は、



当院及び協力型施設の指導歯科医95名に受講証が発行された。

1/19(木) 臨床研修管理運営委員会(全体会議)

18:30

場所:附属病院臨床講義室

【テーマ】「協力型臨床研修施設に対する群内マッチング等説明会」

森田病院長より、ご挨拶と歯科医師臨床研修に対するご理解・ご協力、研修指導に対して謝辞が述べられました。「歯科医師法第16条の2第1項に規定する臨床研修に関する省令の施行について」一部改正(平成28年2月23日付)に関して、研修プログラムへの記載事項の



追加や評価項目の設定、協力型臨床研修施設指定の取り消しについて説明され、当院の対応等も併せて報告されました。



各責任者より、研修指導についてのお願い、研修歯科医のアンケート調査報告、平成29年度の研修プログラムの変更点、研修手帳の記入方法、今後のスケジュール、研修歯科医の給与関連事項等の説明が行われました。

1/24(火) 医療機器安全管理講習会

16:00

場所:創立100周年記念館大講義室

講師:フクダコーリン株式会社 営業本部 東海関西

ブロック 大阪支店 主事 蔵野 光洋 氏

出席者数:73名(教職員)

生体情報モニター等で全身管理しながら歯科治療を行うことは、昨今、稀有な診療ではない。

そこで、講師にフクダコーリン株式会社(旧社名:オムロンコーリン株式会社)営業本部の蔵野光洋氏をお迎えして「モニタリングの基礎」について、本年度最後の医療機器安全管理講習会を開催した。

心電図、血圧計、SpO2等の装着時の注意点から保守点検の留意項目について、判りやすく説明があっ



た。特に日常点検の大切さについて詳細な案内があった。出席者は熱心に耳を傾け、約30分の講習会は終了した。

2/2 (木) 医療安全講習会

16:15

場所: 創立 100 周年記念館大講義室

講師: 株式会社 松風 技術部

品質保証課 主任 樺山 徹 氏

出席者数: 94 名 (教職員)

平成 26 年に薬事法が改正され、薬機法 (医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保に関する法律) が施行されたことにより、医薬品だけでなく医療機器の安全対策を強化することが一つの課題とされている。

(株)松風においても、薬機法に基づいた品質方針を定めている。製品を製造するにあたり、良質な原材料を使用し念入りの品質検査を行っているが、稀に不具合が生じることもある。

GVP 省令 (製造後の安全情報管理の基準) に基づ



き情報収集を行っており、PMDA (医薬品医療機器総合機構) のホームページより自社製品の回収情報や利用者からの不具合情報を随時確認している。その中からダイヤモンドポイントやシリコンカップなどの過去の具体的な不具合の事例が紹介された。不具合があった場合は、当該製品の製造工程や保管品に異常がないかを確認し、使用状況の調査や再現試験を実施することで徹底的に原因を究明し、再発の防止に努めている。

不具合なく安全に医療機器を使用するために、添付文書の内容を確認してから使用する事の大切さを教えていただき、(株)松風の真摯な企業努力が感じられた。

3/23 (木) 歯科医師臨床研修全体会議

● 歯科医師臨床研修 情報交換会

日時: 3月23日 (木) 16:50 ~ 18:30

場所: 附属病院プラザフォーティーン

主催: 大阪歯科大学 学生部

出席者: 大阪歯科大学附属病院歯科医師臨床研修プログラム C (複合型) の研修予定者 81 名 現研修歯科医 77 名



田中昌博学生部長、森田章介病院長の挨拶後、現研修歯科医と研修予定者とが臨床研修について情報交換をした。直接情報が入手でき、アドバイスも受けることができることから好評であった。また、今回は現役研修歯科医、研修予定者とも多数の出席があり、盛況であった。

●歯科医師臨床研修 研修歯科医症例報告会

日時：3月24日（金）10:00～15:10

場所：附属病院臨床講義室

森田病院長の挨拶後、プログラムS（単独型）とプログラムC（複合型）の研修歯科医が、15科の所属診療科ごとに臨床研修症例報告を行った。

当該科の副プログラム責任者等が座長を務め、演者の研修歯科医が7分間で発表した。審査員の先生方からの指摘や質問に窮する場面もあったが、科長



や座長より補足説明等があり、生涯研修の必要を体感できた報告会となった。

各研修歯科医の症例報告が終了した後、教育講演として、口腔外科第2科・障がい者歯科 中嶋正博科長に「障がい者への歯科医療を考える」という演題で講演いただいた。

審査の結果は、修了証授与式で病院長賞（1科）、優秀賞（2科）の表彰を行った。



病院長賞…高齢者歯科「PAPによって経口摂取を回復した症例」

優秀賞…補綴咬合治療科（有歯）「ニケイ酸リチウムを用いたオールセラミッククラウンにて上顎右側 側切歯を補綴した症例」

補綴咬合治療科（欠損）「歯科医師1年目 大阪歯科大学での充実した6年間を経て総義歯製作に挑んでみて」

●歯科医師臨床研修 協力型臨床研修施設による施設紹介・面談会

日時：3月26日（日）9:15～15:30

場所：附属病院臨床講義室

協力型臨床研修施設数：面談ブース施設 29、
プレゼンテーション施設 31

研修予定者：81名出席

森田病院長・臨床研修総括責任者の挨拶後、研修予定者は各施設のブースで施設長等と面談を行った。また、施設紹介プレゼンテーション（5分間）も行われ、研修を行う協力型施設決定に向けて取り組んだ。



●歯科医師臨床研修 研修歯科医修了証授与式

日時：3月30日（木）14:30～

場所：附属病院臨床講義室

修了者：研修歯科医 105名

川添堯彬 理事長・学長から祝辞をいただき、森田病院長から研修歯科医に修了証が授与された。

研修歯科医代表挨拶は、プログラムC 高齢者歯科の西村知倫 研修歯科医が行った。



研修歯科医優秀者として、プログラムS 臨床研修教育科・藤本修平 研修歯科医、プログラムC 補綴咬合治療科（欠損）・上田晶子 研修歯科医の2名が、トクヤマデンタル賞として表彰され表彰状と副賞が贈呈された。

また、研修歯科医症例報告会の病院長賞（高齢者歯科）、優秀賞（補綴咬合治療科（有歯）、補綴咬合治療科（欠損））の表彰も行われた。



|| 2017 年新年互礼会

2017年1月5日、新年互礼会が楠葉学舎講堂で開催されました。

教職員をはじめ多数の関係者が出席し、川添堯彬理事長・学長の年頭所感に耳を傾けました。川添理事長・学長は、多難な時代にあっても、本学はこれからも希望を持って前進したいとの抱負を述べるとともに、本学をさらに発展させるための重点計画と具体策を示し、今後の方向性を明らかにしました。その後、食堂での交歓会では、それぞれ新年の挨拶を交わし、一年の始まりを祝いました。

年頭所感

理事長・学長 川添堯彬

本日ここへお集まりくださいました全ての皆様方、新年明けましておめでとうございます。

私は、年頭のこの席におきまして、二つの強い感慨を持っております。その一つは、私のこの身が心身ともに健康で本年もここに立っていただけるということ、この喜びを改めて今年は強く感じているのでございます。皆様のおかげさまで、このようにここでご挨拶を申し上げる気持ち、これにまさる喜びはございません。

二つ目は、私どもにとりまして、建学の精神に博愛という言葉が使われておりますけれども、100周年記念のときに、この博愛をたずねて、いろいろな著作や人をたずねていったときに、博愛の象徴とも言える人が、セルビア人で、亡くなりましたけれども、聖人に昨年なられましたマザー・テレサ氏であります。世界中で最も有名でございますけれども、日本人の第一番の弟子、マザー・テレサの弟子を自認しておられた方が渡辺和子先生で、シスターですけれども、私は先生と呼ばせていただいております。その人が、人を幸せに、心の持ち方を幸せにするために『置かれた場所で咲きなさい』

という著書を書かれて、大ベストセラー、250万部か270万部も売れている。その先生が、心のよりどころとして、岡山のリトルダム清心学園、清心女子大学を有する学園ですけれども、今もその理事長をされて、89歳にして講義を行っておられる。いろいろな伝記、マザー・テレサの伝記も読みましたけれども、この渡辺和子先生につきましても、ほんとうにすごい人だなと。二・二六事件というのが昭和11年2月26日に起きました。そのときに、渡辺和子先生の実父で旧陸軍の教育総監であられた渡辺錠太郎という方が青年将校の凶弾で銃撃されて命を落とされた。その10メートルほどの至近距離に身内が1人だけおられた。長女の方や錠太郎先生の奥さんは別の部屋におられたんですけども、そこでじかに目撃された人が生き証人としておられたわけでありまして。その方の次女に当た

る渡辺和子先生でございます。二十そこそこでノートルダム清心学園の教授に、間もなく学長になられて、それから何十年、89歳になられたけれども、まだお元気であられる。お元気だと思っておられた先生が、実はこの元旦、1月1日の新聞で、亡くなられた、それも岡山市にあるノートルダム清心学園の理事長室で亡くなられたという記事を初めて読んで非常に驚きました。驚きましたけれども、まだまだ先生は心の中に生き続けるでしょうし、我々の建学の精神の中に生き続ける、博愛と公益を我々の歯科大学が目指すということですね。本学の創立者の藤原先生がそれを引用してからつながっていくわけです。渡辺先生は、昨年の12月30日金曜日の午後1時30分に亡くなられました。直接の病名は膵臓がんだったようでございますけれども、そういう記事を見て私も初めて知って驚



いたわけでございます。

大学に対して、そして日本国の未来について希望を持ち続けること。この言葉を教えてくださったのが実は渡辺和子先生であります。渡辺和子先生の著書の中にこういうのがあります。希望というのは全ての人にかなうわけではないかもしれない。かなわない場合もある。けれども、その希望をいつも失わずに持ち続けること、およそ客観的に見たらかなわないと言われるようなシチュエーションでも持ち続けること。このことがいかに大切であるかということをお教えくださったのが渡辺和子先生であります。この著書はそれほどベストセラーにはならなかったわけですが、なぜか私どもの大学と非常に当てはまるものがあり、私もこの「希望」という短い言葉、これを年頭に一番申し上げたい言葉の一つに選びました。今年の春の卒業生、今、一生懸命、68名の方が最後の卒業試験、学士2を受験している最中で、これによって卒業が決まるわけですが、卒業アルバムにも、この「希望」という言葉を揮毫したいと考えております。

本年も、そういうことで「希望」に始まりますけれども、何とぞよろしくお願ひしたいとここに申し上げる次第でございます。

この後は、例年によりまして、一年の計は元旦にありということで、年頭所感といたしまして、これからの重点計画につきまして、今年の年頭所感のパート2にしたいと考えております。

それでは、引き続きスライドでもって、今年は少し簡潔に申し上げたいと思いますので、ご清聴いただければ幸いです。

昨年は2016年で、丙申（ひのえさる）から、今年は2017年、とり年でございます。



昨年の達成状況といいますが、計画の達成成績を振り返ってみたいと思うのですけれども、ここに黒丸が入っているのは、それは達成し得た、一応の達成完結ということを指しております。三角はま

昨年は
ひのえ さる
平成28年丙申歳でした

達成状況:

- 国試成績は3年連続全国平均を超えました。
- 4年制大学「医療保健学部」-口腔保健学科・口腔工学科
- ODUソーシャルコミュニティが順調に実施。
- ▲ 学生の国際交流活動への参加が増えました。
- ▲ 留年率は前年度よりも少なくなってきました。
- 授業の出席率が低学年でも増えず残念。
- 5年生(病院)時の学力低下が未だ改善せず心配。
- 附属病院の各科患者数がほとんど増加せず改革必要。

だ途中ということですね。半分達成しているけれど、全部いっていない。白丸は、まだちょっとかなっていないということをお知らせしております。

まず、国家試験の成績ですが、今年の3月に発表がありますのは110回になりますけれども、109回、108回、107回の各成績は3年連続で全国平均を超えました。全国平均を3年のうち連続でなくても2年超えますと、文科省の通信簿のバツテンの一つが消えてくれます。本学はこれを、やっと超えることができました。非常に成績は上がってきたと感じております。

それから、二つ目は、4年制大学医療保健学部、これはのちほど少し詳細に取り上げたいと思いますけれども、口腔保健学科及び口腔工学科の認可が1回で、昨年の夏に認可を受けまして、今年の4月から開学ということで、現在、入試、アドミッションを行っているところであります。

それから、三つ目は、態度教育の一つとしてODUソーシャルコミュニティというものを、これは一昨年から始めているわけですが、学生が朝8時から8時半か40分まで、この周辺の清掃活動を毎日行っています。1回サボりますと、また後へ行ってもう一度ペナルティーがつくことになっております。一定の成績と相関があるのではないかと、ところまでできていまして、学生部長を中心としてやっておりますので、今後も続けていただきたいと思っております。

四つ目の学生の国際交流活動への参加

というのが、本学を受験する動機にもなっているようで、全国の私立歯科大学の中で最も活発にやっているのが大阪歯科大学であるということは、今までの国際交流の歴史にもあり、それが受験生の人気も博しているようでございますので、これもさらにできるだけ行き来等をしていく。ここに参加する人は、国家試験の成績との相関があるようであります。

それから、留年率というのは、もう一つ文科省からの宿題になっております。全体として最低修業年限で卒業しなさい、そして国家試験に合格しなさいというものです。これが本学は半分ぐらしか達成していないということで、しかし、留年率は年々教員諸君の教育に対する情熱のおかげで教育力が向上しまして、1年生から2年生、2年生から3年生というのが10%を達成しまして、5%を目標に5%以内の留年率に下げよう。そうすれば、何とか6年間で卒業して試験に合格する率が非常に高くなる。

それから少し心配して、今後さらに力を入れてほしいと思いますのが授業の出席率で、低学年でも、合格した途端にほっとするのか、急にいろんなことで休む。クラブ活動で休んでいるのではないようなんですけれども、それについては、助言教員とかティーチング・アシスタントとか、いろいろな人が学生を呼び出してやっているんですけども、出席率はなかなか低学年が悪い。

それから、5年生のときに臨床実習があるんですけども、このときにどうも一般的な学力試験の実力が低下する、そして、それが6年生1年では取り返しがつかなくて、国家試験の合格率を下げていたと、そういう事実がありますので、これについては非常に力を入れております。しっかりと指導教授がついてやっておりますので、間もなく上がってくるとは思いますが、こういう状態です。

それから、附属病院の各科患者数がほとんど増加しないので、改革が必要。これも今、病院長を中心に非常に力を入れてやっておりますので、

いよいよ2017年、今年ですね。丁酉

(ひのととり)。酉（とり）はこのような字を書くとりですね。丁（ひのと）というのは、くぎの形ですので、上からとどまるべきということで、ちょっとふたをする、ストップをかける、暴走するのをとめるような意味もあるようです。止まるべきときは止まって、暴走とか妄動とかはできるだけ避けるように戒めないといけない。ところが、いいところは、豊かな感性で広く知と体力を培うという字義がございませう。そういうことから、いろいろ易者の世界では、世相といいますか、世の欠陥を補う事業をやると、それを起業すると成功するのではないかと。いろいろ資格をつける、医療の国家試験もそうですけども、手に職をつけて資格を身につけるのがよい。なぜかITやバイオの分野は今年伸びるだろうと。

それから、酉（とり）ですけども、この字形は醸造のつぼの形で、丁（ひのと）で上からふたをしてあるという形ですけど、中では、醸造するというか、醸すという意味があるようでありませう。それから、また翻って、太陽を呼ぶ力が豊富で、豊隆の象徴でもあるということ、この形から来ているようですね。

それで、大体において、このとり年の人というのは、非常に器用で機転がきいて、フットワークがいいといひませうか、ぐずぐずしない、あまり腰が重過ぎないということで、しかも非常によく気がつくし、用意周到ですけども、時によると少し出過ぎるところがあつて、相手から反感を買うこともあるので要注意と書いてあります。したがつて、相手には何でも反対、対抗の姿勢ではなくて、共感の姿勢、共感の態度で臨むほうがよいと、こういったことが易、占いのところでございませう。

この字、これが酉（とり）の字ですけ



れども、これはワープロにも載っているんですね。これは象形文字ですね。大きな鳥ですね。これはくちばしであつて、これが舌ということで、有名な書道家の書いた字、草書になると酉（とり）はこんな字になってきます。

そこで本題に入りますけれども、大阪歯科大学をさらに発展させるには何を達成すればよいか。これは前向きに書いてありますけれども、これをやらないと、これを怠りますと衰退しかあり得ない。周囲の状況からいっても数の論理からいっても衰退しかないということですね。そういうことの一つの事業計画でございませう。

今年、2017年度の重点目標ということで四つに絞りました。これは昨年の

<4つの重点計画>
(平成29年度～)

- 1> **教育力目標**
- 2> **附属病院の改革**
- 3> **医療保健学部の運営**
- 4> **学生の国際交流力支援**

互礼会でも少し申し上げましたけれども、この四つに専ら力を入れないと、一番怖い少子化、ちょっとそれですけども、出生率が今年100万人にまで下がると。昭和45年のときは270万人も生まれていた。今年100万人だった。これから年々30万ずつ減っていく、場合によっては1年で50万減るといふ推計もあるようございませう。そうすると、誰もいなくなるぐらい危うい推計です。2025年ぐらいには大騒ぎになって、2030年、それまでに18歳人口がほとんどいなくなると。少子高齢化という、高齢化は全然怖くないんですよ。大いに100歳、センテナリアンを超えて、125歳も超えて130ぐらいまで生きる研究はここごろしているようですので、130歳ぐらいまで生きてもらつて、100歳から130の30年は高齢者の世界。元気にしていれば、非常に経済的に質もよろしくて生産性も高い。問題は少子化ですね。少子化をどうしようかということ

をみんなで知恵を絞っているんですけども、妙案はなかなかない。しかし、少子化が起こつても、我々の防衛として何とか生き残らないといけなひ。我々大学も、少子化に対して常に抵抗というよりも、そのあるがままでも受け入れて国を築いていかないといけなひし、職業の養成をやらないといけなひ。

その四つとは、教育力、教育の問題ですね。それから、附属病院も改革しないと、これはえらいことになる。それから、医療保健学部の運営。これは、歯科だけではあまりにも底辺が狭くて、歯の単科大学であります。本学のように医療保健学部とか附属専門学校、ほか短大を入れますと、17の私立大学のうち、一、二校を除いてほとんどそういうふうには他の学部へ底辺を広げていってあります。ほとんどが医療系で、まず成功というときは、医療系を選んでいるところは、一応は大きな赤字からは免れて何とかなるだろうと。少子化になつても、何とか医療系の国家試験の資格を持った職業というのは、まだ若者とか働き盛りの人がいる限り、非常にいい職業のチョイスであるというふうにいわれている面もありません。

それから、先ほど言つたように、募集力といひませうか、それは歯科大学を大勢受けてくれる、実質3倍以上の人が受けてくれるようになるためにも、学生の人気の高まりは、国際交流をしている大学、学科を受験しようという学生さんが多いようですので、これに力を入れていかないといけなひという、この四つでございませう。

それで、その一つひとつについて結論的なことだけをかいつまんで申し上げたいと思ひませう。

まず、教育力。

9年前になりますけれども、五つの力(りよく)の目標というのを立ち上げました。そして、さらにそれから二、三年おいて、三つの力(りよく)というのを加えて、合計8策でございませう。坂本龍馬の船中八策がドラマで言われていたところですね。この8策も本学は取り入れてあります。

そして、この五つと三つ、8策はほと

んどがまずまず達成をしつつあります。ちょっと学力は完全には上がりませんけれども、いろんなところがあります。国際交流力も増えております。大学院力など、幾つかはまだ未達成ですけど、ほぼ既にいい線で動いておりますので、結果がだんだん出てくるわけでありまして。

そして、さらに具体的な実践目標として、これは昨年出したスライドですけども、入試倍率を向上させる体制をつくらないといけない。2倍を下回ると全入

【実践目標—五つの力】

- 一、入試倍率向上体制
- 一、確実な進級を果たす
- 一、教え方の工夫へ教員努力
- 一、初年度からの人間性教育
- 一、優れた教員人材を養成

【実践目標—三つの力】

- 一、卒業留学用の英会話習得
- 一、大学院生への経済的・支援
- 一、研究・論文業績の量的増強

平成28年度実践目標

大学だといって文科省に叱られる。確実な進級を果たす、これは最低修業年限6年間で何とか卒業させるような教育でないといかん。教え方の工夫ですから、学生だけ責めるのではなくて、先生方の努力も必要だということで、今や教員の先生はほとんど学生の教育に非常に熱心に、本学は全国でも有数なぐらい先生方が頑張ってくれております。

それから、初年度からの態度教育ですね。人間性教育もやっております。教員人材を養成するという形でほぼ進んでくるわけでありまして。

それから、こちらのほうになりますと、留学したいという人のために、英会話か英検、TOEFL、TOEIC、そういったものを語学教育の一環として希望者にはどんどんやってもらう。大学院生の経済的な支援もいろいろ考える。それから、研究・論文業績の量的増強をする。ちょっと量が減ってきているのが気になるところでございます。

今は大学、短大、それから大学院をつくるとか、何かあると必ずこの三つのポリシーを文科省へ提出しなければいけない。これも本学はもう既に提出したものですけど、この文言に対して、また一段と改善を加えて再提出しなさいということになって、今、教務部長の方で推し進

めて、全学的にこの三つのポリシーに追加しようということを書きかえているところでありまして。この3月いっぱいぐらいでまた提出しなければならぬです。

問題は、こういう文科省の教字に対する、教字だけじゃないですけども、

大学名	B. 削減率				C. 先見率				D. 競争倍率				E. 合格率 (新卒)				F. 最終成績・卒業合格			
	H26	H25	H24	H23	H26	H25	H24	H23	H26	H25	H24	H23	107	100	100	H25	H26	H27	H28	
大阪歯科大学	90%	90%	90%	90%	100	100	100	100	107	100	100	100	75.5	75.5	75.5	63.8	63.8	63.8	63.8	
合計	21.2	21.2	21.2	21.2	2.16	2.49	2.0	2.0	75.5	75.5	75.5	75.5	59.7	59.7	59.7	53.9	53.9	53.9	53.9	

通信簿です。その罰則は何かというと、128名の入学定員を、まかりならんぞということで、そちらへ圧力をかけてきますので、何としてもこのB、C、D、E、Fは達成して、黒丸はいけないということで、赤い星印がついたのは、達成して、黒丸が消えたということをお知らせしております。一つは、削減率を、今現在、本学は160人の時代から128名になって20%削減しているんですけど、あと8%、13人ですね。すなわち115名の規模の、これは一人もまかりならんと、1名オーバーでも叱られるということで、これに対する圧力が一番強いんですね。私立大学に対してもそういう圧力を加えてきているわけでありまして。本学は何とか数年以内にやはり8%を達成しないとイケないんですけども、そういうことで未達成ですね。

それから充足率。3年のうち2年以上が100%になるということ、これは、本学は毎年100%ですから、充足率に関しては全く問題がない。大阪歯科大学は関西の私立大学で非常に独占市場みたいなもので、うらやましがられた時代がありましたけれども、そのなごりというのもあって、多くの同窓の医師からも助言してもらえますので、これだけは豊かですね。

それから、問題は競争倍率ですね。2015年度は、2.95でちょっと上がってききましたけど、それまで1.87、1.91倍ということで、文科省から2年連続未達

成で叱られたわけでありまして。これはずっと低過ぎる。全国平均は2.16、2.49、2.0なんですね。だから、本学は3倍以上という競争倍率を目標に今呼びかけているわけです。

それから、国試の合格率に関しては新卒で計算すると一応言ってくれていますので、これでいきますと、この下が全国平均です。73.3から75.5、73から77.4、72.9から78ということで、これは一定3年連続で達成することができました。しかし、まだこれで満足しておりません。上位ベスト5、あるいはベスト3に私立大学で入るためには80%を目指さないといけない。78.0まで昨年の109回はいったという形ですね。今年はおそらく80を目指せると思うので、非常にプレッシャーをかけるわけですけども、おそろしくいけるんじゃないかと私としては思っているんですけども。もう一息ということで8割、そうするとベスト3から悪くてベスト5になります。

それから、一番難関は最低修業年限の合格率ということで、これは全国平均がやっぱり59.7、53.9、63.8ということで、全国もあまりいいことはないですけども、本学はやっぱりちょっと悪過ぎますね。50%台が多いですよ。45.3というのもありました。これを改善するために、留年率を1年生から2年生、2年生から3年生の低学年のときから鍛えていかないと、息切れして、やっぱり留年ばかりしたり退学になったり、そういうことを繰り返してこれが達成できなくなる。したがって、128名は多過ぎるから、早く100名ぐらいに減らさないと怒られるんです。この通信簿のために、我々は年中教育教育ということをお知らせしております。

教育力目標について、もう一度これは達成目標をまとめてみました。入試倍率3.0以上を目指しますということですね。それから、進級率で数えられる最低修業年限での卒業—ほんとうは合格なんですけれども—を達成します。それから、第1の国家試験と言われているCBT、それから、学士1、学士2の本試験合格。今、きょう現在やっているのは、この学

士2の再試験を68名が受けて、さすが全員が一人も欠席なしできょうは受けるようでありませけれども、これは本試合合格になると、おそらく99%か100%国家試験に合格するというぐらい、本学の学士1と学士2のレベルは高いようがあります。模擬試験と比べても高いです。問題は本試ですね。合格しない。それで再試で合格している率が十分ありますね。30%とは言いませんけれども、そのぐらいが再試でかつかつ進級してきて、あっぴあっぴで受験するものですから、合格率ががたと落ちると、そういう悪循環を呈しているわけでございます。何とか国試合格率80%以上を目下の我々の大学の目標として、2017年はこれを一つでも多く達成したいと思います。できればすべてを達成したい。

次は、教育を挙げますと、やっぱり教育が1本の大きな柱ですが、附属病院というのも大学にとりまして非常に大きな柱でございます。ここを改革しないとイケない。私のほうの年頭所感でも、今まで附属病院はあまり俎上に上げてこなかったんですけど、そうは言われてられない。

〈附属病院の役割〉

- 1> 患者数が多いこと
- 2> 症例が豊富
- 3> 医科歯科連携
- 4> 多職種協働
- 5> 診療参加型臨床実習-実患者
- 6> PostCC-OSCE-実患者
- 7> スペシャルニーズ対応

それで、附属病院を客観的に見ますと、この1から7の役割があると言われます。1から4というのがだんだん難しくなっているんですけども、しかし、患者数が多ければ、財務的にも赤字にならないし、それから学生の教育も達成できるし、いいところだらけなんですけれども、その患者数がなかなか、各科で2割アップを目標に、今年こそ2割アップを達成しないと、その科の存在がなくなるというわけで、ほんとうに大変なことになります。患者数が多いと症例が豊富であるということですね。それから、医科と歯科との連携ですね。高齢者

が増えますと、歯の治療、虫歯の治療でも歯科だけでは治せない、医科のほうに連絡をとっておかないと、血圧とかバイタルな情報も皆調べてからでないと歯科治療ができない、糖尿病の有無なんかを調べないと歯科治療ができないということで医科歯科と。それから、最近は医科歯科連携だけではなくて、多職種協働ということで、もっといろいろな国家試験を通った付随的な業務がございます。歯科衛生士や歯科技工士だけではなくて、ほかにもいっぱいある。そういったところとの協働ですね。ナース、看護師さんもそうでありますけれども、できるだけ患者数が多いとそうなりますね。

黄色で引いた三つは、これは学生の教育に附属病院は役割を持っているということで、厚労省ではなく文科省が非常にやかましく言っているのは、診療参加型臨床実習をやらないと、模型だけでは、あるいはファントムだけではだめですということ。見学だけで済ませている大学もあるんですけど、とんでもない。日本の医科系のレベルは大学によってあまりにも違うなんていうことは、世界、グローバルな市場に出せないぐらい恥である、日本の医学教育はどうなっているんだと、そういうことを非常に恐れているんですね。したがって、全て実患者でないと認めませんというのが診療参加型臨床実習ですね。ずっと昔は臨床実習に関して我々の時代も実際の患者さんを直に学生がどんどん診ている時代が多かったんですけども、最近は、大学のほうから与えるようになってから一層患者さんのほうも嫌がるんですね。あんまり成績が悪い学生に当たりたくないとか、そういう形になって難しいわけですけど、それをもとに戻せということですね。ですから、もしそれができないんだしたら、家族を連れてきて、それで臨床実習をやればいいんじゃないかというところが徐々に増えてきました。

それから、6番目はPost-CC OSCE、これは臨床実習の実習試験のことですね。クリニカルクラークシップの後にもう一度OSCEをやりなさいと。臨床実習が終わってから試験をやり直し、それはまた実患者でないだめなんです。当

然、こっさりその大学だけでやっているのではだめで、外部評価者ということで、全国の大学から選ばれた審査員が見に来た、その目の前でやらないといけなからごまかしはきかないということで、実患者をどのようにやるかが附属病院の一番重要なところですね。

スペシャルニーズ対応というのは、最近、いろいろな医科歯科連携、あるいは多職種連携に伴って、例えば口腔リハビリテーション学や障害者歯科、スポーツに絡んだ歯科のニーズ。それから、何よりも地方完結型の、地方だけで独立してやれるようなスペシャルニーズに対しても、これはいきなり患者さんを全部診るのは難しいので、高齢者歯科のように訪問や在宅などもスペシャルニーズですけど、それはかなり行って、訪問や在宅に学生を連れていくといったこともやっているようなんですけども、まだ少しは余裕があります。この5と6は即やらなければならない。だから、附属病院を最もシンプルに、これだけは絶対しなさいといったら、この5、6だけを何とかやることができれば、あとのものは全部オミットして、これだけの病院を建て直せば2階建てぐらいで済むかもわからないですよ。一般的にはそれだけでも許可されるということですね。ですから、よくよく本学は、これで患者が増えない場合には、あそこをクローズするしかないということになりますね。どこかで、例えばこの楠葉のテニスコートのところに2階建てでもつくって、そこで臨床実習専門、Post-CC OSCE 専門の患者だけを診る病院をつくれば、何とかこの大阪歯科大学の屋台骨はキープできますね。ですから、天満橋の病院はいい場所にあるけれども、それだけ非常に荷が重いんですね。患者があつたら荷が重いことはない。非常に充実する。患者がなかったら、あれは大赤字の病院になってしまうわけですね。そして、これもできないという形になりますから、附属病院の役割は失墜してしまうわけでございます。

それで、なぜこういうことになってきたかということですけども、これは、中医協の資料を厚労省が出すんですけど、これは、20年、30年前の歯科治療

というのは、う蝕と歯周病の二つ、特にう蝕がものすごく多かった。それに修復治療、削って詰めて、それで次は抜髄して、それでコアを入れてクラウンを入れる、それで手おくれになったら抜歯してブリッジ、それでパーシャルデンチャーを入れて、それがだめになったら総義歯、歯科治療といったらほとんどこれだったんですね。こういう健常者型というのは、どんどん疾病構造の変化で減ってきて、現在の、あるいは今後は、う蝕とかを修復、こうやって削って詰めてというのは、教育の場では残っているんですけど、現実ではほとんど減ってしまっている。それに反して、今度は治療の難しいリスクが増加した高齢者。高齢者に歯を詰めてくださいといっても、やれ血圧はかる、やれ糖尿病調べる、いろんなことをやらないとそれを完結し得ない、リスクだらけになってくるんですね。だから、医科歯科連携、あるいは多職種連携、あるいは入院していただいてから歯科治療、あるいは在宅で診る、外来だけではなかなか診れない全身的な疾患が合併している有病者の歯科治療ということにほとんどなって、七、八割がそんな世界になってくるというんですね。非常にリスクがある。

それで、ここに患者さんの家があります、歯が痛くなったり歯に穴があきましたとかいって、一般の開業医さんのところへ来たり、歯科大の附属病院へ来ても、終わったら帰って、歯の治療は完璧に治りましたと。こういう時代が1980年代で、現在は2010年代のもう2017年になりましたから、大分こっちへ近づいていますけども、これが歯科に来ると医科病院にも行かないといけない、あるいは、場合によっては介護施設で歯が痛い痛いと言って泣いていると、そこには往診していかないといけないという実態が今こうなっているわけです。

それから、2025年になりますと、さらに分化してきまして、ここに地域包括支援センターとかいう何もかもその地域、コミュニティーだけで全部完結しないということ、あんまり地方の大病院へ連れていかなくても全部治せるという方向にする地域包括支援センターをつ

くって、ここでは医者もいれば、ほかのタイプの入院施設もある、そういう形に変わっています。これは人口構造がこんなだから仕方がない。

歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議(調査・要望)	
1. 診療参加型臨床実習の充実—実患者	<未>
2. PostCC-OSCE—実患者での臨床能力試験	<未>
3. 多様な歯科医療ニーズ等に対応した養成	<合>
4. 教育活動等に関する情報の公表	<合>
5. 歯学教育認証評価の導入	<合>
6. 歯学部入学定員削減(128人→115人)	<未>

そういうことで、患者さんが減るのは当然なんですけれども、文科省が強く赤印で言っているのは、診療参加型臨床実習を充実させる。このことばかり言われます。本学もこれは未達成の中の烙印を押されております。Post-CC OSCE、これは今後、まだ数年間、2020年は医学部が全部これに変わるということで、それに乗りおくれないように医科と同時に法制化してやろうということですから、2020年といったらオリンピックの年ですから、もう4年間しかないんですね。それぐらいせっぱ詰まった状態になって、これが本学は達成できるかということになります。

それから、多様な歯科医療のニーズに対応する、これは本学は合格です。教育活動に関する情報の公表、これも合格。それから、歯学教育の認証評価も受けております。この三つは達成。赤いところですね。それから、歯学部の入学定員、何度も言われるんですけど、128あるのは努力が足りない、これを8%減らして115名に下さいということになります。しかし、その後、私立大学は財務が心配になってきて、今の教員の数を大分減らさないといけないということになります。

附属病院の改革、これまでをまとめます。患者数の増強、全診療科をとりあえず20%増、これは是が非でもやらないと。だから、街頭に立ってでも患者さんを引っ張ってくるぐらいの熱意でやらないと、自然に任せて来る人だけを診ようか式ではほとんど集まらないということですね。土曜日の全科開院。隣近所でも

土曜日やり出しましたし、附属病院は全国ほとんど土曜日やっておりますので、本学だけまだだと。今は矯正と小児歯科の2科だけがやっていますが、あとはやれていない、これは患者が増える見込みがもっと立たないということになるのではないかと。医療収入をアップして少しでも経費を抑えての黒字化に努力しないといけない。しかし、患者数が増えてくれば、教育もできるし、経費のほうも健全化するのそれはほど難しいことではないと私は思っております。

それから、いつも言います、学生に対しては診療参加型臨床実習、そして、胸にスチューデントデンティストとか学生ドクターとかいうのをつけて、それで患者さんに何とか頭下げて患者になってくれませんかというふうにして実患者で診ないといけない。臨床能力試験という実習試験はありますけど、これも実患者で達成しないとけない。これが附属病院の実態でございます。

これで二つの達成が終わりました。三つ目は医療保健学部の運営。これも一つの大きな将来の流れとして、単なる歯学部の単科大学では生きていけないという時代になりつつあるので、こういふ次の保健学部を立ち上げて認可を受けました。それで世間といいますか、周りをおと驚かせているんですけども、とにかく我々はフロントランナーであって、これを成功させるべく努力しないとけない。

<4年制大学(医療系学部)新設>

- 中教審の答申(平成28年): 背景
- 「専門職大学・大学院制度」(平成29年~)
- 専門学校 ➡ 短大 ➡ 4年制大学+大学院
- 歯科衛生士、歯科技工士資格の職域拡大
- 大阪歯科大学大学院
「医療保健学研究科口腔科学専攻(修士課程)」

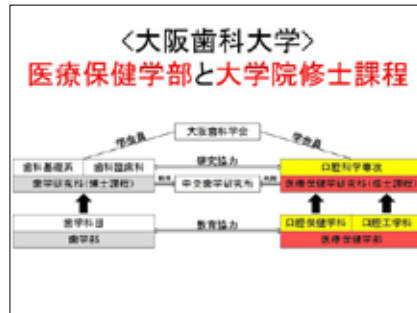
これが成功すれば、ほかのぞろぞろまたついてくる。4年制大学がなぜこんなにする必要があったのかという背景を申しますと、2016年に、中央教育審議会の答申を内閣府が得まして、二つのことを決めました。一つ、先の下から行きますと、国にお金があったら、国はやっぱ

り専門学校を全部短大か四大にしたいんですね。そしたら、世界に冠たる日本の歯科教育が一番だと。ちなみに、これは日本が最先端だと思っていたら、世界で中国でも二つの学校が、すなわち四川大学華西口腔医学院と北京大学、これはもう既に歯科技工士の4年制の大学ができていますよ。そして、さらに台湾、台北医学大学にも4年制の歯科技工士の学部ができていますね。もう既に東京医科歯科大学の4年制の技工士養成・口腔保健工学専攻は、国際交流でお互いに意見交換し合っている仲、そのようにどんどん進んでいるのに、日本はなかなかまだ専門学校が増え続けているんですね。短大、いっても3年、衛生士なんかは専門学校3年、短大3年、どこが違うんだということで、経営者は、短大になっても先生の数を増やさないといけないし大変だから短大はやりたくない、専門学校のままだってほうがいいんじゃないかということもあるようですけれども、それではいけません。もっと学歴を上げてくださいということで、4年制の大学。こうすると、6年制も4年制、それから薬科大学も獣医学校もみんなそういう大学へ4年または6年制の学校が出そろうわけです。そうすると、多職種連携ができてくるわけですね。もちろん看護師の看護大学はたくさんできて、福岡歯科大学も昨年、看護学部（福岡看護大学）を認可されています。

さらに、医療系学部では特に女子が多いんですけども、ここに入っても、成績優秀な人は、私は大学院へ行きたいという学生は大学院へ行きました。そういう人には、ここへ積み上げて大学院をつくったらどうですか、まずは修士課程をつくったらどうですかということで、本学は大阪歯科大学大学院を申請するわけでありまして。そして、10月ごろに早ければ医療保健学研究科口腔科学専攻、修士課程ですね。そういう将来はドクター課程を、歯学部にも博士課程がありますが、こういうのを一つつくりたい。そうすると非常にそろうわけですね。職域拡大にもなるし、いろんな面でよい。

それと、もう一つは、専門職大学院制度というのが、早ければ、今、国会を通

る寸前で、昨年の12月に大方通るかなと言っていたのが、国会でちょっといろいろ懸案が多かったと見えて少し延びておりますけど、中央では真ん中ぐらいの時期にはこれは認可されるであろうということで、専門職大学というのが一つの大きな格付になると思われまして。



こういう背景がありますから、これは大阪歯科大学が描く4年制の医療保健学部と2年制の大学院修士課程をそろえたならば、ちょうどこの四つの四輪車ができて上がります。大学院と中央歯学研究所は研究に取り組み、お互いに研究協力をし合う。そして、歯学部はじかに4年制の大学院、歯学研究科博士課程へ進んでおります。基礎系と臨床系に分かれております。そして、次に医療保健学部ができました。口腔保健学科と口腔工学科が二つあります。そして、ここへ乗せたい。これがなかったら何となくこちらが一つ地盤が落ちているようないびつな三角形になりますので、医療保健学研究科修士課程、これをつくれば、ちょうどこれは四角形になって、いろんなことが達成できて、将来、こちらのほうの病院とか教授とかも養成できる。将来の指導者層も、歯科医師でなくてもこちらで賄えるという感じになるわけですので。それを目指しているわけです。

そして、これは、医療保健学部には口腔保健学科と工学科があって、どういことを学ぶのかということで、大学院、この流れの専攻がありますけど、口腔機能回復学分野、先進口腔保健学分野、口腔基礎、医療保健教育学分野、口腔材料学、材料は絶対来ますね。それから、先進口腔工学分野、このようになります。

それで、医療保健学部の運営ということで、結論といいますか、まとめます。

まずは、やっぱりまだ知名度がないの

で、口腔工学士といたって、あれは何だとか言われる。今、いろいろ広報やアドミッションの増強を行っております。オープンキャンパスだけではなく、電車のつり革まで入れてPRしないといけないので、なるべく費用の安いところで影響力の大きいところを探して、そしたら、いろんな業者がそういうのをよく知っていて、これだったら安くて影響力がありますよというのを教えてくれるわけでありまして。新聞の紙面、テレビ、インターネット関連、それからホームページで見せるという。

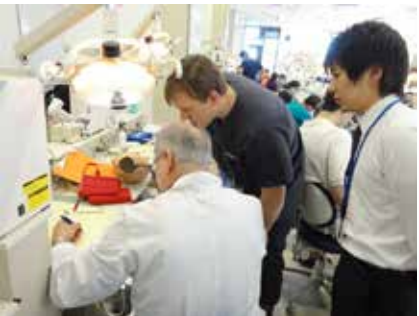
それから、職域拡大、キャリアパス支援、これは、いい就職口を選んだら、今度、次、来年に入る人が見えていますので、給料は普通の3年制の専門学校を出たよりもちょっと上乗せしないといけませんけれども、そういうところを探しています。広島大学に口腔工学科ができて、それで、1年目、2年目の卒業生はほとんどが歯科医院や歯科関係者として卒業しなくて、パイオや証券会社へ行ったり、そういう人まであった。それはちょっと私は本来の趣旨から離れて、あくまでも歯科の地位を高めるために働くようにしないと。歯科医の開業医の先生にご理解をいただく。また、それを志願する高校生が、たとえ募集人員が減ったといいますが、18歳人口が減ったとしても、ドイツのマイスター制度のようにそちらへ進む人が必ず出てくる。そういうみんなと同じ見方で並べて、そういう変に差別化したものではないという、隷属した職業とは違うという、その意識が高まったら、やっぱり医学部と同じようになってくると思われます。

それと、やっぱりこれは4年ですけど、国家試験は必ず100%とるように、ここの教員の先生は歯学部以上にこれが求められます。これを100%とると、やっぱり志願者が増えてくると思えますね。それから、国際交流はやっぱり非常に人気が高まるわけですので、現実はまだ探せばもっと世界に技工士の4年制、あるいは衛生士の4年制というのがあると思えますね。そのために英会話力も促進します。これが目標でございます。

最後は国際交流力の支援でございます。これの意義は、これは昨年、おと



しですかね、今卒業して研修医をやっている人の学年であります。これはコロンビア大学へ行った、これだけたくさん、全部本学の学生です。それで、そこへは引率の先生もこうやってちゃんとして行ってくれますし、向こうのアメリカの歯学部の学生、この辺はみんなどっちが日本人かどうかわかりませんが、そういうのが一緒に交流して、楽しそうに向こうの教育も受けてくるという、そういう形で行っております。



これは、病院を見学あるいは実習するために、病院のインストラクターとともにこうやって実習をやらせてくれる。向こうのラボラトリーですね。すぐに患者を診ているところが隣にあるわけですから、そこでも実習をやらせてくれる。これは国際交流関係を結んでいるからこういうところへ入っていけるので、一人で単独でちょっと見学させてくださいなんて言ったって門前払いを食うわけで、非常に親切に教えてくれるのは、大阪歯科大学のブランドが、きちんと国際交流の



実績があって、協定を結んでいるからやってくれるわけです。

それで、これは、11月か12月にいくと、ニューヨークは雪景色が非常に多い。この辺は、アメリカの歯学部の学生ですね。この辺が本学の学生ですね。一緒に放課後か、いろんなことで楽しんでいるわけでありませう。



この学年は、また次で、中国の四川。四川大学は非常に熱心で、全中国の中で歯学部が一番古い、北京大学よりずっと古くから、ほとんどの教授はこの出身から派遣されているということです。本学からは特に優秀なこのお二人が行って、窪先生が引率、この方は本学の矯正学の第1期生で、大学院生で学位を持って、四川大学の教員として雇用してもらって、ここでやっている人ですね。そういう人も元気にやっています。



この二人が非常に成績がよくて、実習試験が向こうであり、中国の人や日本から来た人と、世界から several な大学の



学生が集まって、コンペティションというか、コンクールをしました。

途中でやり方を教えてもらって、この方は向こうのインストラクターですね。こちらは本学の学生。今、卒業生ですね。成績は十分国家試験に合格するのは間違いないというぐらいよくできる子です。



この二人が、実はこれ、1というのはVじゃなく、1等賞をとったということで、優勝者だそうですね。この荣誉证书をもらってきたということで、この子らはやる気満々で、ニューヨーク（コロンビア大学）へ行ったかなと思ったら、今度はそこだけでは飽き足らないで、もう一度中国へも行く。あともう一つ、イギリスのキングスカレッジも行きたいと言っていましたけど、ちょっと時間的に……というような二人であります。今年卒業でございます。



それで、これと同じですね。これは石川君ですね。あと、この方がスウェーデンから来たコロンビア大学の教授で、国際交流を担当しています。あとはみんな大阪歯科大学の面々であります。このような感じで、見学のときはぱりっとしています。

ということで、まとめます。国際交流になぜ力を入れるかというと、国際交流に熱心な学生ほど国家試験の合格率が高いという結果が統計で出ております。本学でも優秀な学生、人材が集まっている

と思います。この人たちは、本学を卒業したら大学院に行く、1年の臨床研修を終えてこちらへ残る、本学へ残るとか、あるいはまた、もう一度ゆっくり1年か2年かけて留学したいという人も出てくると思います。

それから、向こうから来る人も、国際交流に熱心な学生ほど成績優秀というのは先生からも聞いております。それから、何よりも学生の夢と将来の希望を啓発できる、モチベーションが非常に強くなるという、こういう四つの長所を持っておりますので、内向きにならずにできるだ

け外国へ行くと。

こういことで、とり年を何とか実りの多い年にしようということで、歯神さんも張り切っているところでございます。

それで、これは、元旦に春日大社に行ったら大吉を引きましたので、ちょうど明治天皇の御製だったので、スライドにしました。「とき遅きたがひはあれど、つらぬかぬ」、遅い早いはある、貫いていけば、まこと、誠実ならことは実現しますよという意味らしいです。

では、こういう四つの重点目標をでき

るだけ早い時期に、できましたら2017年度に早く達成しないと、だんだんと最も恐れる2020年以降、2025年の少子社会が18歳のところまで押し寄せてきますので、これに打ちかたないといけな、そういう思いで重点計画を立ててみました。ご清聴ありがとうございました。

第110回 歯科医師国家試験結果

2017年2月4日(土)・5日(日)の2日間にわたり実施された第110回歯科医師国家試験結果が3月17日(金)に発表されました。

本学学生・既卒者の合格状況は、右表のとおりです。新卒者の受験については、4年連続全国平均を上回る合格率を達成しており、第110回については、全国29大学中5位、私立歯科大では3位という好成績でありました。

	新卒	既卒	合計
受験者数	81名	79名	160名
合格者数	74名	44名	118名
合格率	91.4%	55.7%	73.8%
(全国平均)	76.9%	46.6%	65.0%

平成28年度 専門学校卒業式

2017年3月14日(火)、第52回歯科技工士専門学校卒業式ならびに第40回歯科衛生士専門学校卒業式が行われました。

当日は多くの来賓にご出席いただき、歯科技工士学科から13名、歯科技工士専攻科から4名、歯科衛生士学科から38名が大阪歯科大学から歯科保健医療の世界へと新たな一歩を踏み出しました。

小正裕校長、田中昭男校長から一人ひとりに卒業証書が手渡され、ご家族への敬意とお祝いと卒業生のたゆまない努力に対して賛辞がおくられました。

すべての教員と在校生が見守るなか、それぞれが思いを胸に臨床の現場へ出発いたしました。



|| 2017 年度 大阪歯科大学学術研究奨励助成金（大学院生）

課題番号	氏名	専攻	学年	研究課題	助成額(円)
17-01	塩谷 一弘	歯科保存学	4	ヒト歯髄由来神経幹細胞における BDNF の影響	165,000
17-02	東 仁	歯周病学	4	経歯膜で行う歯周外科が骨吸収およびコラーゲン合成に及ぼす影響	165,000
17-03	藤田 敦子	歯周病学	4	歯周組織の慢性炎症である歯周病におけるグルコシルコラーゲン糖鎖化酵素 LLG-1 (HSD1) の役割について	165,000
17-04	三木 晴加	歯周病学	4	咬合荷重による歯周組織再生に関する基礎的研究	165,000
17-05	山内 伸登	歯周病学	4	LED 照射がヒト歯髄幹細胞に及ぼす影響に関する研究	165,000
17-06	山村 高也	有歯顎咬合学	3	経路大気圧プラズマを用いた歯科材料への炭化グラフトコーティング	165,000
17-07	吉川 依輔	有歯顎咬合学	3	Co-TPP/A を用いたニューズメタルコープタアウターの着脱回数と維持力の関係	165,000
17-08	西崎 真澄子	欠損歯列矯正咬合学	3	表面接合制御と塗した新製セラミック材料がインプラント進入局組織に与える影響について	165,000
17-09	石川 敬祐	口腔外科学第一	4	口腔外科への最適なフォトリソグラフィコーティングの開発	165,000
17-10	松瀬 和也	口腔外科学第一	4	イミド取得大綱モデルを用いた新規型補綴材料の歯周組織再生	165,000
17-11	上田 希	口腔外科学第一	3	顎骨吸収大限治療のための臨床応用可能な IP6 由来多孔質炭素骨格の開発	165,000
17-12	中西 隆	口腔外科学第一	3	ナノテクノロジーを利用した DRG の口腔外科領域への応用	165,000

計 12 件 2,000,000

|| 平成 29 年度 事業計画

はじめに

本学は、建学の精神である「博愛」と「公益」を、教育・研究・診療等の全ての諸活動の根幹に据え、教育基本法及び学校教育法に則り、歯科医学に関する学術の理論及び応用を教授し、併せて人格を陶冶し国家社会のために有用な人材を養成するとの目的に則して、歯学部、大学院歯学研究科、歯科技工士・歯科衛生士専門学校を設置して、関西唯一の私立歯科医学総合学園として多くの有為な歯科医療人を輩出してきた。

平成 29 年 4 月に、口腔保健学士、口腔工学士を養成する医療保健学部を新たに設置し、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士等の多職種連携による新しい歯科医療の充実を目指し、大きな一歩を踏み出すこととなった。

平成 29 年度の事業計画は、建学の精神を基調とし、「八つの力」とともに「教育力目標」「附属病院の改革」「医療保健学部の運営」「学生の国際交流力支援」に重点的に取り組んでいくものとする。

歯学部においては、前年度に引き続き、「平成 28 年度文部科学省私立大学等改革総合支援事業」において、タイプ 1「教育の質的転換（建学の精神を生かした大学教育の質向上への取り

組み）」に採択されたことから、平成 29 年度も個性豊かな特色あるカリキュラムにより教育力の一層の充実発展を図る。すなわち、初年次教育を重視するとともに、指導教授、助言教員、教育アドバイザー体制による学生の精神面や学習態度のサポートを行うこと（育み・寄り添い教育の充実）や、成績上位者へのオナズ教育、FD による教員の資質向上を図り、一層教育力の充実を目指すとともに、15 の海外提携大学との学生・教員の国際交流の活性化を図る。

大学院歯学研究科においては、基礎系大学院生、社会人大学院生の募集を進展させ、本学における将来の教育・研究・診療を担える人材の育成を行う。

医療保健学部においては、歯学部との連携を図り、超高齢社会となっている我が国の歯科医療の担い手となる優秀な歯科医療人を育成していく。さらに同学部を基礎とする大学院医療保健学研究科口腔科学専攻（修士課程）の設置を目指す。

附属病院においては、地域医療機関との連携を深めること、土曜日の診療を矯正歯科、小児歯科に加え、全科（17 科）で実施することとともに、合わせて参加型臨床実習の充実も図り、もって患者数の増加を目指すことで収支改善に注力していく。

このように、平成29年度は、本学の特色を生かし上記の計画を着実に達成していくことで、教育・研究・診療の各分野の水準の向上のため努力するものである。

■ 平成29年度事業計画 ■

平成29年度の事業として次の項目を掲げ、着実に実行していくものである。

I 大学学部等の改革

【歯学部】

1. 教学-a(第1学年～第4学年)の改革
2. 教学-b(第5学年、第6学年、既卒者)の改革
3. 教学関係規程の見直し
4. 研究に関すること
5. 国際交流に関すること
6. 社会連携・社会貢献・広報活動に関すること

【医療保健学部】

1. 口腔保健学科
2. 口腔工学科
3. 教育課程の編成の考え方及び特色に関すること
4. 学部拠点の整備に関すること
5. 学生の受け入れ等に関すること

【歯科技工士・歯科衛生士専門学校】

II 大学院の改革

1. 歯学研究科博士課程
2. 医療保健学研究科口腔科学専攻(修士課程)の設置準備

III 教員人材の整備

IV 附属病院の改革

V キャンパス施設・設備の整備

VI 法人・大学の管理運営

I 大学学部等の改革

本学は、教育基本法の規定する教育の一般的な目的と方針とに則り、歯学に関する学術を中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の領野における学理技術を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって文化の創造と発展に貢献することを目的としている。

【歯学部】

平成29年度は、前年度に引き続き万全の体制で学生指導に邁進する。

1. 教学-a(第1学年～第4学年)の改革

(1) 学生の受け入れ

- ・学生の受け入れ方針(アドミッションポリシー)に基づき、優秀な学生を確保すべく、平成30年度入試(平成29年度実施)では、以下のとおりの施策を行う。
- ・一般入試(前期・後期日程)における大学入試センター利用入試を継続導入し、入試制度の多様化を図っていく。
- ・平成27年度に導入した入学初年度にかかる学費を免除する入学試験成績優秀者特待生制度を活用し、優秀な新入生の確保を

図っていく。

- ・入試倍率3倍以上を目標として、本学の魅力を受験生にアピールすべく積極的な広報活動を推進していく。(本学ホームページによる入試関連情報の発信、オープンキャンパス、4月当初からの全国各地での入試相談会の開催、高校・予備校での本学教員による出張講義、アドミッションセンター職員による高等学校・予備校への訪問等)

(2) IR(Institutional Research)室と教学部門等との連携
教学部門及び歯科医学教育開発室等との連携を一層強化し、入学段階から卒業までの学生の実態や学習効果が俯瞰できるデータの蓄積を行い、日常の学生指導に役立つ情報を提供する体制を整備する。

(3) 学生の教育支援について

- ・6年間の教育課程を通じて、学位授与方針(ディプロマポリシー)に基づいて低年次からの学力レベルの向上(留年者の減少)、確実な進級を果たすべく教育支援に取り組んでいく。

・本学が重視している態度教育科目として、平成28年度から第1学年次に新設した「現代教養」において、学習態度の確立やオナズ教育を行う。

・「ODU ソーシャルコミュニティ(枚方市の環境美化活動)」は、第1学年から第4学年までの全ての学生が参加する継続事業であり、規則正しい生活習慣を身につけさせる。

・学生カルテの機能を充実させ、学生情報の共有化を図り、教育支援の基幹システムとして活用することを目指す。

・「文部科学省私立大学等改革総合支援事業」の採択を受けて、学生の主体性を一層引き出すための教育を行う。

・「研究チャレンジ」を積極的に行い、学生の研究力の向上を目指す。

・「SCRIP 参加研究」、「TOEIC、TOEFL 受験」についても積極的に展開していく。

・高い進級率を達成することを目指すとともに、第4学年次に行われる共用試験(CTB、OSCE)の高位合格率(本試験合格)を目標にした対応を行う。

・楠葉学舎、天満橋学舎の学内食堂を自習室として開放したことにより、学習環境の改善に繋がっている。今後、学舎全体の自習室の利用状況をモニタリングし、学生の学習環境の見直しを図っていく。

・学修の手引き(シラバス)、学生生活ハンドブック等の学生指導指針の更新を行い、学生に対してその活用を促していく。

・薬物乱用防止、女性被害防止に関する講演会を企画し、安全な学生生活を過ごすうえで必要な知識の啓発を図っていく。

・近年、精神面に対する支援体制として、学生相談室カウンセラーを楠葉・天満橋両学舎に配属し、年間を通して個別面談を行う。

・障害者差別解消法が施行されたことを受け、すでに本学では「障がいのある学生の修学等の支援に関する指針」が制定されているが、漸次支援体制の整備を行っていく。

2. 教学-b(第5学年、第6学年、既卒者)の改革

(1) 第5学年への教育

・クリッカーの導入による出欠管理の徹底と、臨床実習の成績と臨床知識試験（年5回）と臨床講義、臨床実習終了時試験の実施により学力の向上を目指していく。

・臨床実習について、全診療科での「自験」を実施する。

(2) 第6学年への教育

学士試験1、2本試験全員合格と、歯科医師国家試験の高位の合格率（新卒者合格率80%以上、最低修業年限国家試験合格率の向上）を目指していく。

(3) 既卒者への対応

既卒者教務部委員会により、既卒者のモチベーションを向上させる指導を継続したことにより好結果が現れている。平成29年度も個別指導・相談の徹底、相談会への定期出席を厳守させる。

3. 教学関係規程の見直し

学生への履修指導を徹底するため、学業成績評価に関する規程等に関して見直しを行う。

4. 研究に関すること

・科学研究費補助金をはじめ各種競争的外部資金の獲得件数を高めるよう研究活動の活性化を図る。

・研究倫理については、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に沿った取り組みを行い、研究者の倫理観を向上させる。

・平成29年度に、創立100周年記念式典が行われるコロンビア大学との学術交流を一層活性化させる。

・大阪歯科大学学術リポジトリの充実を図り、本学の保有する学術研究の成果を社会に還元し、国際的な発信力の強化に繋げていく。

5. 国際交流に関すること

グローバル大学として、中国、韓国、ベトナム、台湾、アメリカ、イギリス、ハンガリー、ウルグアイの海外15大学との学術交流協定締結校との事業を継続して行い、一層の充実を図る。また、科学技術振興機構の「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」の実施申請を行い、アジア地域と日本の科学技術の発展に寄与する。

6. 社会連携・社会貢献・広報活動に関すること

・枚方市の学園都市ひらかた推進協議会事業、健康医療都市ひらかたコンソーシアム事業に積極的に参加し、地域連携を推進する。

・本学公開講座の内容を充実させ、市民の健康（健口）づくりに貢献する。

・本学の魅力をアピールするため、ホームページのリニューアル、広報誌（ODUNews）の内容の充実を図る。

【医療保健学部】

目的：広く医療の観点から、社会福祉、地域訪問看護ならびに医療コミュニケーションを通じて、人間性豊かな歯科医療に携わる医療人の養成を行い口腔の健康に大きく寄与することを目的とする。

1. 口腔保健学科

目的：従来の歯科予防措置、歯科診療補助、歯科保健指導に加

えて、口腔機能リハビリテーションや、介護にも高い専門性を有する歯科衛生士を養成する。

2. 口腔工学科

目的：従来の歯科技工だけでなくデジタル加工技術に優れ、医療と介護にも豊富な知識を持って現場に出る、超高齢社会に必要なとされる歯科技工士を養成する。

3. 教育課程の編成の考え方及び特色に関すること

①医療人としての素養の形成、歯科の基礎的な知識の獲得、歯科臨床の知識の獲得、歯科臨床の技能の獲得、実践能力の獲得、教育内容の整理と知識と技能の固定化を体系的に行う。国家試験合格率100%達成にむけた教育、英会話力アップのための教育、学生の国際交流の推進を学部運営の基本軸とする。

②医療人としての素養の養成、口腔リハビリテーションや訪問歯科診療などの高齢化に応じた知識と技能の獲得に重点を置く。

③学部の取得可能資格としては、歯科衛生士、歯科技工士国家試験受験資格とともに、意欲ある学生に対して社会福祉士国家試験受験資格の取得ができるコースを置く。

4. 学部拠点の整備に関すること

牧野学舎をメインキャンパスとし、既存校舎改修及び設備の更新等の環境整備を行うことで経費の抑制を図る。

5. 学生の受け入れ等に関すること

・学部の認知度と入学定員充足率を向上させるため、本学ホームページの内容の充実とともに、受験生の確保に向けて高校訪問などの積極的な入試広報活動を行う。

・学生生活を過ごす上で必要な事項の概要を作成し、学生のサポート体制の充実を図る。

【歯科技工士・歯科衛生士専門学校】

医療保健学部への改組転換に伴い、歯科技工士・歯科衛生士両専門学校は、すでに新入生の募集を停止しているが、これまで培われた各学校における特色ある教育を活かし、従来からの良き伝統である国家試験合格率100%、就職率100%という輝かしい実績を4年制大学学部教育へ継承していく。

II 大学院の改革

【大学院歯学研究科博士課程】

本学大学院歯学研究科は、大学院生に歯学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与するとともに、大学院生を当該専攻分野に関する高度の研究指導者に養成することを目的としている。

1. 大学院生の入学倍増への取り組み

・基礎系を専攻する学生への優遇策の継続実施（授業料等の減免）

・臨床系の新専攻科目の開設などを検討する。

・社会人大学院生の受け入れを促進する。

・外国人留学生の受け入れを促進する。

- ・大学院生・ポストドクトラルフェローの海外留学を支援する。
- ・大学院生の優秀論文表彰制度の継続実施
- ・大学院歯学研究科ホームページの充実による広報

2. ポストドクトラルフェロー事業

大学院博士課程修了者のうち2名の枠を設け、研究活動の継続及び後継者養成のため本学大学院に採用する。

3. ティーチング・アシスタント事業

15名の枠を設けることで、学部学生に対する教育補助業務を行う。

4. 学術研究奨励助成金

大学院生に対して若手研究者育成のために研究助成を行う。

5. 学術研究奨励資金事業及び若手研究者奨励金事業

日本私立学校振興・共済事業団事業で、研究計画を学内公募のうえ選考し、事業団へ申請する制度を積極的に活用する。

6. 海外研究発表助成事業

大学院博士課程第3・4学年を対象に、海外で行われる学会でのファーストオーサーで研究発表を行う場合に研修費として助成する。

【大学院医療保健学研究科口腔科学専攻（修士課程）の設置準備】

超高齢社会の到来とともに、歯科医療の重要性は高まっている。要介護高齢者が増加し社会問題となっている現在の状況下で、口腔リハビリテーションを含めた歯科医療を支える医療専門職としての歯科衛生士、歯科技工士の役割は拡大している。医療保健学部で学んだ卒業生のキャリアパスとして、学生の教育と口腔保健学、口腔工学に関する研究を行う人材の継続的養成は急務である。

そこで、平成29年度は、本学医療保健学部を基礎とする大学院医療保健学研究科口腔科学専攻（修士課程、修業年限2年）設置に向けた準備を行うこととしている。

III 教員人材の整備

1. 教員評価の実施

「新授業評価表」による優れた教員の発掘で教員力を高める。アクティブラーニングなどを取り入れた授業を行う人材を育成するためのFD研修会を頻繁に実施する。

2. 人材の登用

・大学院修了者・ポストドクトラルフェローへ海外留学を推奨し、本学の「海外留学経験者の特別採用に関する規程」に基づき帰国後に教員任用を図っていく。

・客員教授、Visiting Professor、Honorary Visiting Professorによる講義など特色ある教育の展開を促していく。

IV 附属病院の改革

本学附属病院は、本学学則の第1条の目的に則り、患者診療を通じて歯科医学の教育研究を達成するとともに、地域社会に貢献することを目的としている。このことを踏まえ、地域における患者ニーズに合った良質な歯科診療を行うとともに、臨床

研修施設として歯科医師の養成と資質向上に取り組んでいる。

特に近年、文部科学省の強い要請により、診療参加型臨床実習について、自験の徹底とそれに伴う患者確保の重要性が指摘され、またPostCC-OSCE（臨床能力試験）が必須となる方向性が示唆されている。本学附属病院では、学生教育に注力するとともに、合わせて新しい歯科医療提供体制（高齢者、スペシャルニーズ患者について対応できるきめ細かな体制）を整え、一層の医療収入の改善に向けて取り組むものである。

平成29年度においては、引き続き附属病院の機能を一層充実させる取り組みを推進し、経営効率の一層の向上を図り、次の事項の実現を目指す。

- ・17診療科の延べ患者数の2割増加を目指す。

- ・土曜日における17診療科の開院

- ・附属病院ホームページの内容を充実させ、患者ニーズ（診療医員の担当曜日スケジュールの表示など）に即応できる体制を整える。

- ・先進的な歯科治療を提供する役割を発揮するため、地域医療機関からの受け入れを円滑に進める。

- ・訪問歯科診療（国家公務員共済組合連合会大手前病院）、MRI特殊検査（関西医科大学天満橋総合クリニック）の継続実施

- ・地域の診療所への支援として、CT、MRI、歯科用CT、検体検査及び病理組織検査を継続実施していく。

- ・歯科医師派遣（沖縄県、阪神福祉事業団、日本放送協会大阪放送局）の継続実施

- ・患者への説明責任、医療倫理の遵守とその徹底を行う。

- ・歯学部附属病院医療事故防止相互チェックへの参画

- ・医療安全に関する講習会により、医療人としての職業意識の向上を図る。

- ・病院情報システムの活用による医療サービスの一層の質的向上を図る。

- ・臨床研修施設として、優秀な歯科医師を養成する機能を充実させる。

- ・公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価を受けるべく基盤整備を行う。

- ・省エネルギー対策を徹底し、エネルギー使用量と経費の抑制、削減を図る。

VI キャンパス施設・設備の整備

平成29年度における施設・設備の整備予定（抜粋）は、次のとおりである。

【楠葉学舎】

- ・1号館ディスクリプションスイッチ更新

- ・第7、8実習室歯科技工用モーターの取替（5年計画の3年目）

- ・第7、8実習室技工機テレビモニター交換

- ・コンピュータ実習室、LL教室改修工事

- ・中央歯学研究所における研究用機器備品の拡充

低温大気圧プラズマ装置、ゼータ電位・粒径・分子量測定システムなど

- ・廃水処理設備整備工事
- ・ガス吸収式冷温水発生機整備工事
- ・PAC（エアコン）整備工事

【牧野学舎】

- ・医療保健学部の校舎改修及び設備の更新等の環境整備

【天満橋学舎】

- ・附属病院本館機械駐車場更新工事
- ・ガス吸収式冷温水発生機オーバーホール
- ・附属病院西館エレベーターリニューアル工事
- ・消防設備整備工事
- ・X線一般撮影システム更新
- ・人工透析用水処理装置更新
- ・傾斜型安全キャビネット設置

VI 法人・大学の管理運営

法人・大学の運営を効率的に行っていかなければならない。

平成 29 年度においても、経費を削減・抑制し、業務の改善に努力していく。

・徹底した経費の削減・抑制を図る観点から、学内会議で配付される膨大な紙ベースの資料について、タブレット端末を使用したペーパーレス会議を実施していく。

・歯学部・大学院歯学研究科のメインキャンパスの楠葉学舎、医療保健学部のメインキャンパスの牧野学舎、歯学部・同附属病院の拠点である天満橋学舎の3学舎の有機的な連携を図るため、情報ネットワーク環境の整備を行う。

・教職員の業務上の資質を高めるための研修会、人権意識高揚に向けた講演会を行う。

・事務職員の知識修得のためのSD（スタッフディベロップメント）を実施し、近年変化の著しい業務内容の変化に即応できる人材の育成を図っていく。

・教職員の省エネルギーへの意識を高める啓発活動を組織的にを行い、エネルギー使用量と経費の節減の実績を上げるよう努力していく。

|| 寄贈

下記のとおり寄贈を受けました。心より感謝いたします。

- ・大阪歯科大学第 32 回卒業生・藪田宗孝氏 | 『できる！を伸ばす弁当の日』 | 他書籍 / DVD 8 点
- ・大阪歯科大学第 24 回卒業生（錦会） | 卒業 40 周年を記念して | 学術助成金 100,000 円
- ・大阪歯科大学第 34 回卒業生（壮志会） | 卒業 30 周年を記念して | 一般寄附 100,000 円 (以上 2016 年 11 月 12 日)
- ・大阪歯科大学第 9 回卒業生・篠田修氏 | 圧延機（ローラー）及び急冷器 (2016 年 12 月 14 日)
- ・大阪歯科大学スキー部 OB 会 | スキー部創立 50 周年を記念して | 一般寄附 100,000 円 (2017 年 2 月 5 日)
- ・大阪歯科大学第 65 回卒業生 | 卒業を記念して | 楠葉学舎 4 号館 2 階図書館 備品一式（机・椅子 ホワイトボード等） (2017 年 3 月 10 日)

|| 平成 28 年秋の叙勲受章者

平成 28 年秋の叙勲において、大阪歯科大学関係者として、以下の先生方が受章されました。

大学 10 回	西岡 忠文	香川県	旭日小綬章	大学 13 回	井堂 孝純	兵庫県	旭日中綬章
大学 11 回	中島 康則	岐阜県	瑞宝双光章	大学 15 回	北折 忠之	奈良県	旭日双光章
大学 12 回	高橋 淳	京都府	瑞宝双光章	大学 16 回	板倉 紘一	兵庫県	瑞宝双光章
大学 12 回	中西 武志	徳島県	瑞宝双光章	大学 16 回	豊川 輝久	兵庫県	旭日小綬章
大学 12 回	西岡 征二郎	高知県	瑞宝双光章	大学 18 回	古川 壽男	大阪府	旭日双光章

|| 人事

大学役職者 アドミッションセンター長	田中 昭男 2016.8.1 付	昇 任 歯科矯正学講座 生理学講座	准教授 西浦 亜紀 講師 藤本 哲也 以上 2016.10.1 付
特別昇任 口腔治療学講座	教授 吉田 匡宏 2017.3.31 付	昇任・所属変更 口腔外科学第二講座	主任教授 中嶋 正博 2016.10.1 付
教員採用 障がい者歯科	助教 田中 佑人 2016.10.1 付	再任用 歯科東洋医学室	専任教授 方 一如

歯周病学講座 小児歯科学講座	主任教授 主任教授 以上	梅田 誠 有田 憲司 2016.10.1 付	英語教室 高齢者歯科学講座 歯科東洋医学室 総合診療・診断科 口腔治療学講座 歯科放射線学講座 臨床研修教育科 歯科技工士専門学校 大学事務局 中央歯学研究所事務室 医事課 附属病院	主任教授 主任教授 専任教授 専任教授 教授 准教授 講師 教員 大学事務局長 主任 主任 歯科技工士 以上	佐ノ木幸夫 小正 裕 方 一如 小出 武 吉田 匡宏 古跡 孝和 小川 文也 木下 浩志 亀井 崇 村上よし子 鶴野 祥子 中辻 孝一 2017.3.31 付
大学院教員任用 大学院助教		木村 大輔 2016.12.1 付			
大学院准教授 大学院講師		西浦 亜紀 河井まりこ 以上 2017.1.1 付			
職員採用 大学庶務課 医事課	事務職員 事務職員 以上	石丸 史彦 川畑智世美 2016.9.1 付			
経理課 大学企画部 大学企画部	事務職員 理事長・学長秘書 理事長・学長秘書 以上	高橋 直也 古川 理能 栗原 理沙 2016.10.1 付	依願退職 総務課広報担当	事務職員	成海 友在 2016.8.15 付
アドミッションセンター 附属病院	事務職員 看護師 以上	吉田 桃子 中川 愛梨 2016.12.1 付	有歯補綴咬合学講座 欠損歯列補綴咬合学講座	助教 助教 以上	大河 貴久 前田 武志 2016.9.30 付
附属病院 施設課	看護師 主任 以上	谷山 千景 松本 淳一 2017.1.1 付	歯周病学講座	講師	河野 智生 2016.10.31 付
附属病院	看護師 以上	牧瀬 由依 2017.3.1 付	附属病院 附属病院 附属病院	看護師 看護師 看護師 以上	宮内 仁美 今田 有香 成松那津美 2016.12.31 付
職員登用 人事課 インスティテューショナル・ リサーチ室 図書課 病院庶務課庶務担当	事務職員 事務職員 事務職員 事務職員 以上	鈴木絵理子 田中 貴久 伊藤さよ子 武居 正悟 2016.8.1 付	附属病院 附属病院	薬剤師 専任教授 講師 講師 助教 助教 助教 主任 放射線技師 以上	竹村 薫 2017.2.28 付 末瀬 一彦 金平裕久美 岩田 有弘 田幡 元 小石 玲子 向井 憲夫 赤瀬 裕子 宮本 優人 2017.3.31 付
昇進・所属異動 アドミッションセンター	課長	中谷 悟 2016.8.1 付	有歯補綴咬合学講座 総務課 附属病院	助教 助教 助教 主任 放射線技師 以上	坂井 大吾 農端 健輔 坂井 加奈 2017.3.31 付
医療保健学部事務室	課長補佐	加奥 奏哉 2017.1.1 付	任期滿了退職 欠損歯列補綴咬合学講座 歯科矯正学講座 歯科矯正学講座	助教 助教 助教 以上	原 美津恵 森田 恭生 吐山 寛 堀内 賢 2017.3.31 付
所属異動 総務課 アドミッションセンター 施設課 大学院課	主任 主任 事務職員 事務職員 以上	赤瀬 裕子 栗村 法往 小谷 泰生 橋本 照美 2016.8.1 付	再雇用任期滿了退職 教務学生課楠葉担当 医事課 医事課 附属病院	事務職員 事務職員 事務職員 歯科技工士 以上	武森 政文 2017.1.31 付
医療保健学部事務室 医療保健学部事務室 医療保健学部事務室 大学企画部 病院庶務課	室長 主任 事務職員 事務職員 以上	溝本 幸三 佐々木久恵 南 やよい 小谷 泰生 吉田 桃子 2017.1.1 付	再雇用依願退職 附属病院	歯科技工士	2017.1.31 付
兼 務 専門学校事務室	室長	溝本 幸三 2017.1.1 付	講師(非常勤)委嘱 口腔解剖学講座		竹内 雅規 2016.12.1 付
定年退職 口腔病理学講座	主任教授	田中 昭男			

|| あとがき

前号に引き続き、本学が重点目標に掲げる学生の国際交流事業・短期海外研修のレポートを掲載しました。現地の様子や学生たちが海外の歯科医療と向き合う姿など、参加者が研修先でどのように過ごしているのか、臨場感を味わっていただければ幸いです▶また本学では海外の協定締結校からの学生受入も活発に行っており、2016年はアジア4大学とシドニー大学歯学部から学生等が来学。英語に

よる特別講義や本学附属病院、歯科医療機器メーカー工場見学などを体験し、先に海外研修に参加した本学学生を中心に、互いの友情をより一層深めました▶さらに本号ではSCRIPやボランティア、スポーツなどで活躍する学生たちの様子もお伝えしています。これからもさまざまなフィールドで活躍する学生や教職員を紹介していきますので、お楽しみに。

大阪歯科大学広報 第178号

2016.08.01 ~ 2017.03.31

発行月 2017年12月
編集発行 大阪歯科大学広報委員会
〒573-1121
枚方市楠葉花園町8-1
TEL 072-864-3111
